
PSPo2 ~ If Story ~

雪風の使い魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P S P O 2 ｝ I f S t o r y ｝

【Nコード】

N 8 3 6 0 U

【作者名】

雪風の使い魔

【あらすじ】

星と宇宙を巡る冒険の世界で、一人の男が一人の少女と出会う。物語の舞台となるグラール太陽系で巻き起こる危機に、彼は仲間たちと共に立ち向かった……。

これは、作者の妄想によって作られた二次創作小説です。

はじめに(前書き)

この小説は、ゲーム

「ファンタシースターポータブル2」(PSP02)「」のストーリー
に合わせた二次創作です。

とりあえず、最初の文を読んでください。

はじめに

はじめまして。

雪風の使い魔です。

初投稿で駄作ですが、よろしくお願いします。

ここは、小説の大まかな設定を載せてあります。
ここで、読むかどうかの判断をお願いします。

1・主人公はオリジナルキャラです。一応、主人公のオリジナルストーリーも考えています。

2・所々にアレンジは加えていますが、台詞等はゲームからそのままとっています。

3・ゲームをプレイした事がない方にはわからない部分があるかもしれません。

4・全体的に文字の表現の仕方におかしな所があると思います。作者の国語力が低いので……。

ここからはオリジナル主人公の設定です。

他にもオリジナルキャラは出す予定ですが、それは後々……。

「名前」

ダイト・アーディガン

「年齢」

20歳

「種族」

ヒューマン

「性別」

男

「タイプ」

ハンター

「容姿」

赤髪で少し目つきが悪いイメージ。

体格はデブでもガリでもない標準。

服は黒系のジャージメントコート（わからない方はとにかく黒い服でイメージしてください。）

「武器」

近接武器を色々使わせる予定です。

……こんな感じですよ。

こんなものでよろしければ、お付き合いお願いします。

プロローグ（前書き）

まず、プロローグです。
少し手を加えてます。

プロローグ

それは遙か遠いところのお話。

母なる太陽と三つの惑星を持つグラール太陽系。そこに住む『ヒューマン』と彼らから生まれた『キャスト』『ニューマン』『ビースト』は、外宇宙から飛来した謎の生命体『SEED』による襲来を受け、滅亡の危機を迎えた。

しかし、四つの種族は一人の青年を筆頭に心を一つにして戦い、激しい攻防の末、これを封印した。

そして、四つの種族をまとめあげ、世界を救うまでに導いた青年を人々は『グラールの英雄』と称したが、彼は戦いが終わるとともに姿を消した。

消息不明となった彼を誰もが死んだと思い『グラールの英雄』は幻となった。

……それから三年後。

グラールには、SEEDとの攻防の傷跡がいまだに深く刻まれ、資源枯渇が深刻な問題になっていた。

外宇宙への移動を可能とする『亜空間航行理論』が提唱され、再興の道を外宇宙への大規模な移民計画に求めた。

政府、軍、三惑星中の企業は結束し、『亜空間航行』の実現化へ向けて動き出していた。

グラールの新しい未来を願って……。

プロローグ（後書き）

まだ序章です。

次回から主人公が出てきます。

先は長いです……。

第1章 Act 0

〈出会い〉(前書き)

今になって投稿です。
文字を打つのに時間が……。

パルム海底に新たな未開のレリクスが発見され、その調査依頼が発令された。

各分野のスペシャリストが集まっている人混みの中で、ダイト・アーデイガンは退屈そうに立っていた。

(結構な人数だな……。なりふり構わず集めた結果か……)

右手にだけ着けている革の手袋をいじりながらそんな事を考えているダイに一体のキャストが近づき、話しかけた。

「……これだけの人数が集まっているってことは、大手のスポンサーがついているようだな。久々に儲けられそうだ。」

「ああ、そのようだな。」

「うむ、どうやらお前も傭兵のようだな。」

「そうでなければ、ここにいないだろう。」

実際、ここに集まっているのはほとんどが傭兵である。

特に傭兵であることが条件というわけではないが、何が起ころかわからない危険な場所での調査にやってくる一般人はいないだろう。

「ははは、たしかにな。どこの所属だ？俺の見たところ、中々の腕のようだが……」

「所属はない。フリーの傭兵だ。所属していた経験はいくつかあるが……」

「そりゃ大したもんだ。ま、場所が場所ってことあって、腕利きを集めているのかもな。」

「たしか、つい最近発見されたんだったか？」

ダイがそう聞くとキャストの男は補足するように答えた。

「ああ、この海底レリクスの調査はほとんどされていない。このあたりは安全なようだが……。奥は、まさに『未開の地』ってわけよ。」

そんな会話をしている二人の耳に、その場所には似合わない少女の声が聞こえてきた。

「帰ろ、帰ろうって！」

キャストの男は声のした方向に視線を向けた。それにつられるようにダイも視線をその方向に向ける。

そこには、一人の少女がそばにいるビーストらしき男に対して、何か抗議をしているようだった。

「ここ、レリクスでしょ？ほんとにヤバいんだって！」

「……なんだ、あの子供は？腕利きの傭兵のようには、とても見えないが……。」

「少なくとも、傭兵ではないな。」

「……まあいい。俺はもう行く。依頼内容の確認をしておきたいからな。」

そういって、キャストの男は去っていった。

再び一人になったダイは、ふと先ほどの少女がいた場所へ視線を向けた。

そこには先ほどのビーストの男はおらず、少女が一人で立っていた。

（無理矢理に連れて来られた新人……か？）

ダイがそんな推測をしていると、少女がいきなり頭を抱えてうずくまった。

すると、次の瞬間……

ゴゴゴゴゴ……

突然の大きな揺れがレリクス内を襲った。

「おい、やばいぞー！」

「逃げろ！閉じ込められるぞー！」

誰かがそう叫ぶと集まっていた傭兵たちは我先にと出口に向かって走り出した。

「……………くっ、なぜ出口が閉まっていく!?」

ダイも出口に向かって駆け出したが……

「……………っ!?」

突如訪れた頭痛がその足を止めた。

あまりの激痛にダイは頭を押さえて膝をついてしまった。

その頭痛が治まるころには、周りの傭兵たちは居なくなっていた。

「はぁ……………。不幸だ……………と。」

レリクス内に取り残されたダイが、とある男子高校生が言うような

台詞をつぶやいていると……

「出して、出してよー！このっ、このやるっ！開きなさいよー！」

出口の方から聞き覚えのある少女の声が聞こえた。

(あいつは、さっきの……)

出口のトビラの前には、先ほどビーストの男に抗議していた少女がいた。少女はトビラに向かって叫んだり、トビラを叩いたり、蹴ったりしていた。

「開けっ！開きなさい！もう！ほんと、いい加減にしてよ！」
(いい加減にするのはお前だ。それで開いたら苦労しないだろ。)

ダイはため息をつきながら、少女がいる場所に向かって歩き出した。

「……はあ。……だから帰ろうっていったのにさ。ここはヤバいって、あれだけ言ったのに、なんで聞いてくれないかなあ……」
「一人の子供がそんなことを言っても信じないだろ。」

ダイが声をかけると、少女は警戒しているような表情をしてダイの方を向いた。

「……誰？」

「落ち着け。お前と同じ境遇の人間だ。」

「ああ、そっか。閉じ込められちゃったの、あたしだけじゃないんだね。」

少女は一人ではないことに安心したのか、落ち着いて状況を整理し

始めた。

「何が起きたかって、わかる？」

「いや、急に地震が発生したってぐらいか。」

「……だよな。あたしもいきなりでそれどころじゃなかったし。気がついたら、みんなは逃げ出してるし。……はあ、どうしたらいいんだろ。」

少女の声がだんだんと小さくなっていく。

その傍ら、ダイは脱出するための手段を考えていた。

「……トビラが開く様子はない。……破壊するのは、無理だな。……そうなる。」

ダイは、レリクスの奥へ視線を向けた。

「……って、まさか奥に進む気？」

ダイの考えている事を察したのか、少女はまたも抗議を始めた。

「無理無理！やだやだ！危ないって！ここ、未開のレリクスなんだよ？すっごいあぶないんだよ？」

「まだ調査されていないなら、どこかに出口があってもおかしくないだろ？」

そういうと、ダイはレリクスの奥に向かって歩き始めた。

その右手には、念のためにセイバーが握られている。

「あつ……ちよっ、ちよつと待って！一人で行っちゃうの！？」

「行きたくないなら待ってても構わないぞ。出口を見つけたら戻る。」

「行くから！あたしも一緒に行く！」

そう言いながら少女はダイの後を追うように歩き出した。
一人になるのが嫌なようである。

「あ、まだ名前聞いてないんだけど……。」

「ダイト・アーディガンだ。呼ぶときはダイでいい。」

「……ふ、ふーん。あ、あたしはエミリア。エミリア・パーシバル。
えっと、その……これからしばらくは一緒だから……。……よ、よ
ろしくね。」

「ああ、よろしく。」

遅めの自己紹介を終えた二人はレリクス奥へと進んで行った。

これが、この二人の出会いであり、物語の始まりとなる……。

第1章 Act 0

〈出会い〉（後書き）

こんな感じで大丈夫でしょうか？

誤字、脱字、批判などがありましたら遠慮なくどうぞ。

次からやっとな本編の第1章に入ります。

また時間がかかりそうですが……。

第1章 Act 1

〈翼を抱いた少女〉（前書き）

第1章 Act 1

戦闘シーンは苦手なので大幅にカットしてます。

途中でテクニクについての説明がありますが、作者が考えた勝手な解説ですので、スルーを推奨します。

第1章 Act 1

〈翼を抱いた少女〉

「ああー、やっぱり原生生物がわんさかいる。見逃してくれたら、しないよねえ……。」

「そうだったら、傭兵なんか必要なくなるな。」

奥のトビラを抜けたブロックには複数の原生生物が存在していた。先ほどまで集合していた場所以外はまだ調査が行われていないため、ここから先がどうなっているのかは誰もわからない。

「……あの、えっと、えっとね。直前でこんなこと言うのはなんだけど……。あたし、武器は持ってても、戦闘経験なんてほとんどないの。」

とても言いづらそうにエミリアはそう口にした。

正直に言うと、ダイはそんな予感がしていた。戦闘経験のある者があの場で『帰ろう』などとは言わないだろう。

ましてや駄々をこねるように言っていればなおさらである。

(……とはいえ、このタイミングで言われるのも困るが。)

「……だから、がんばって！あたしは応援してあげるから！」

「ふざけるな。自分の身ぐらいは自分で守れ。」

「ええっ！？いやっ、ちょっと待って！」

エミリアの必死になった表情を見たダイは、仕方なしに案を考えた。

「はあ……。テクニックは使えるか？」

テクニックとは、攻撃、守り、回復など様々な方面で活用できるい

わゆる魔法のようなものである。使用者の精神力によっては非常に強力な戦闘手段にもなる。

ちなみにダイはテクニックが苦手であり、主にセイバー（片手剣）やソード（大剣）といった近接武器での戦闘を得意としている。

「……え？まあ、どちらかというところ、近接武器よりはテクニックの方がいい、かな。」

「フォイエは使えるか？あとは、レスタも使えるといいんだけど……。」

フォイエとは火の玉を放つテクニックで、レスタは対象者の体力を回復させるテクニックである。

どちらもテクニックの中では、扱いやすい初級レベルとなっている。

「……それぐらいなら、なんとか。」

「なら、お前は後方からの援護だ。基本は俺が相手する。」

「うん……。えっと、ごめんなさい……。」

「そう思うなら、援護をしつかり頼む。」

「わ、わかった。」

「よし、行くぞ。」

ダイはセイバーを構え、雄叫びのような声をあげている原生生物『エビルシャーク』に向かって駆け出した。

ダイとエミリアは順調にレリクスの奥へと進んでいった。

途中、戦い方について質問してくるエミリアに対して、ダイは戦いながら一つ一つ質問に答えた。

そんな状況でも確実に敵を倒し続けているダイを見ていたエミリア

は驚きの連発だった。

「すごい、さすが傭兵って感じ。」

迫り来る原生生物たちを撃退し、一息ついたところでエミリアはそう口にした。

「なんか、ちょっとホツとしたよ。あんたがいれば、安全っぽいしさ。」

その口調はさつきまで怯えていたとは思えない明るい口調だった。

「ほとんど、俺が相手しているようなものだな。」

「うつ……。……。だ、だって、あたしは軍事会社に登録されてるだけで、戦う気とかなかったんだもん……。なのに、あのおっさん、あたしが働かないってムリヤリ連れ出して……。」

だんだん愚痴を言い始めたエミリアを見て、ダイは自分の推測が的中したことを実感した。

「あー、だんだんハラが立ってきた！こんなかわいい女の子を一人にするなんてひどいと思わない？」

「かわいい女の子かどうかは別として、働かないのはどうかと思うが？」

ダイは正直に答えた。

軍事会社に登録されているのならば、それなりに仕事をこなさなければならぬ。

働くとはそういうものである。

「ぶー！なによ！あんたもおっさんの味方？……ちょっと、かよわい女の子は別として……ってどういう意味よ！？」

「いや、別に。」

「うー、いいいいよ。結局みんなそうなんだから。……あたしの言うことなんてだれも本気で聞いてくれないんだ。」

エミリアは拗ねたような口調だったが、途中からは少し落ち込んだような口調になっていた。

「とにかく、あんたがいれば無事に帰れるような気がするし、おっさんにはあとで文句言いまくってやる。SEEDはもう存在しないからレリクスは安全だ、とか言っただけであたしのいうこと信じてくれないしね……」

「……SEED、か。」

「……？どうしたの？」

「なんでもない。SEEDは三年前に封印されたんだから、そういうのが普通だろう。」

このグラールには、いまだにSEEDとの攻防による傷跡が残っているが、三年前にSEED自体は封印されており、気にする必要はないはずなのだ。

しかし、エミリアは話を続けた。

「そりゃ、今まで発見されていたレリクスはSEED襲来があったときばかりに機能を覚醒させていたよ？でも、全部が全部そうだったかっていうと、そういうわけじゃなかったんだよね。一説によると、SEEDの散布する素粒子に反応して起動してるみたい。だけど、同時に磁場の乱れも観測されるから、それだけじゃないと思うのよね。」

「……なんだと？」

説得力のある理論を話すエミリアにダイは耳を傾けた。
そして、一つの質問をした。

「なぜ、そう思う？」

「だって、そもそもSEEDは三年前に一掃されたはずなのに、レリクスは起動してるでしょ？」

「……っ！たしかに。じゃあ、どうして……」

「レリクス自体が何らかのプログラム管理である以上はトリガーとなるものも、それに準じた……」

あまりにも説得力のありすぎる理論を口にするエミリアにダイは驚きの視線を向けた。

半分以上はわからないというのが素直な感想なのだが。

そんな視線に気づいたのが、エミリアは何かを思い出したかのように言葉を止めた。

「……あ。え、ええっと……」

「随分と詳しいな。」

「あ、いや……。こ、このくらい常識でしょ？」

「随分とレベルの高い常識だな。」

「常識！常識だって！傭兵だったら誰だって知ってて当然なの！」

「おまえはたしか、軍事会社に登録されているだけなんだよな？傭兵として当たり前の常識をよくそこまで調べたな。俺も一応傭兵だが、そんな常識聞いたことがない。」

「……」

図星をつかれたのか、エミリアは少し戸惑いの表情を浮かべた。

「いい、今の説明は忘れて！どうせあたしが何言ったって、誰も信

じてくれないんだし！」

「どうしてそう思うのかは知らんが、少なくとも俺は信じるぞ。」

ダイがその意見を述べるとエミリアはア然とした表情でダイを見た。

「え……？信じて……くれるの？」

「正直、納得ができる内容だ。あの時、間近にいた人間でもな。」

「間近にいた……ってどういうこと？」

「……なんでもない。」

「……って、こんなこと話してる場合じゃない！早く先に進もう！」

そういつて歩きだしたエミリアの表情はわずかに微笑んでいるように見えたが、その事にダイは気づかなかった。

自分自身の言った言葉に頭を悩ましていたからだ。

（何を考えているんだ、俺は。あの時のことは忘れるんじゃないか？
たのか？）

「なにしてんのー？早く行くよー！」

エミリアはダイに向かって叫んだ。

その声はまるで別人のようで、最初に出会った時のような不安な様子は感じられなかった。

（……とにかく、今はここを出るのが先だな。）

そう決断し、ダイはエミリアのいる場所へ歩き始めた。

いつの間にか二人の立ち位置は初めて出会った時とは逆になっているのだった。

「エミリア！ヤツの足元を！」
「数打ちや当たる！やあつ！」
「いい狙い……だつ！」

ダイの的確な指示でエミリアも少しずつだが、戦闘に参加し始めた。エミリアが敵の足元にフォイエを放ち、動きを止めたところをダイがとどめ、というのが一連の流れである。
なんだかんだ、二人は中々のコンビネーションで奥へと進んで行った。

そんな中、エミリアの急激な成長ぶりにダイは表情には出さないが驚いていた。

(エミリア自身は気づいていないだろうが、センスはあるな。……
本人のやる気が問題か。)

ダイがそんな事を考えている内に、前方に次のブロックへ続くトビラが見えてきた。

「随分奥まったところまで来たけど、まだ出口みつかんないの？」
「それらしきものは見当たらないな……。しかし、このまわりにあるものは……」

「うん、大型の自律機動兵器だね。」

二人が入ったブロック内の壁には『スヴァルティア』と呼ばれる巨大な人型の兵器がズラリと並んでいた。そのすべてが二人を見下ろすようにたたずんでいる。

「ただでさえこっち見てて怖いのに、もし動き出したらって考える
と……ねえ、早く行こうよ。」

二人が足早にその場を離れようと歩き出すと……

ガシャンッ！ガシャンッ！

大きな音が二人の後方から聞こえてきた。

その音は、機械が地面に落ちたような音で、それが足音のようなり
ズムを刻んでいる。

「……ねえ、ダイ。今のつて……」

「……嫌な予感しかしないな。」

二人はゆっくりと振り返る。

先ほどまで壁にたたずんでいた自律機動兵器の内の一体がそこに
いた。

鋭い爪を身につけているその手には、しっかりと武器である巨大な
斧が握られている。

「……ちよっ、じよ、冗談でしょ！？言ったそばから動き始めない
でよ！」

「はあ……」

次々と発生する問題にエミリアはもうなにがなんだかわからなくな
っていた。

一方、ダイは呆れたかのようなため息をついた。

「落ち着け、もう考えるのも疲れた。」

「ど、どうすんのよ!?!?」

「大丈夫だ。」

ダイはソードを装備して構えをとった。

「大丈夫……って、まさかあいつと戦う気!？」

「逃げた先に出口があるとは限らない。狭い通路で追い詰められるより、この広い場所のほうが戦いやすい。」

「……ううー、うううーっ!」

エミリアはうなり声をあげていたが、そのうち観念したのか自分の武器のロッド（杖）を構えた。

「……わかったよ、あたしも覚悟を決める!その大丈夫って言葉、信じるからね!」

「ああ……」

エミリアの言葉にダイはわずかに笑った。

そして、この状況で一番有効な戦法を考えた。

「戦い方はさつきまでと大体同じだ。お前は後方からの援護だが、今回は足止めだけじゃなく本体への攻撃も加えろ。絶対に正面から近づくな。」

「わかった!こんなところで死んでたまるかつつーの!」

「……行くぞ!」

一人はただ冷静に、一人は半分やけくそに『スヴァルティア』との戦いに挑んだ。

二人はコンビプレーを中心に奮闘していたが、次第に疲労の色が見えてきた。

特にエミリアは肩で息をしている状態でもう限界だった。

「ちっ……！しぶとい兵器だな。」

「……ダイ、あ……あたし……もう……。」

（こっちも限界だ……。……仕方ない。）

長くは持たないと判断したダイは、一つの賭けにでた。

「エミリア。あと一発、フォイエは撃てるか？」

「え……？い、一発ぐらいならなんとか……。」

「……よし、できる限り最大で撃てるように力をためておけ。俺が奴の動きを止めたら、奴の頭部に全力でぶつける。どうやら頭部が一番ダメージが大きいようだ。」

さっきまでの戦闘の中でエミリアのフォイエがスヴァルティアの頭部に命中したとき、わずかだがよろめいたことをダイは見逃さなかった。

ダイは戦いながらも敵の様子を観察し続けていたのである。

「ええっ！？それって、ダイが囷になるってこと!？」

「平たく言つとそうなるな。」

ダイは淡々と答えた。

あまりにも分の悪い賭けにエミリアは慌てたが、ダイはそれを制した。

「安心しろ。俺はそう簡単にはやられん。」

「ダイ……。」

ダイのその言葉にエミリアは覚悟を決めた。
これ以上戦闘が長引くと不利になるのは自分たちである。
エミリアはその分の悪い賭けにのった。

「わかった、やってみる」

「準備ができたら合図をくれ。……行くぞ！」

ダイは単身スヴァルティアに突っ込んで行った。

それと同時にエミリアは目をつぶり集中し始めた。

チャンスは一度……。外せば終わり……。

その状況がエミリアの集中力を高める。

「お前の相手は俺だ！こつちに来い！」

ダイはスヴァルティアの注意をひくため、大声で叫んだ。

その挑発に乗ったのかスヴァルティアは巨大な斧をダイに向かって振り下ろす。

しかし、ダイは適度な距離を保ちながら確実に攻撃をかわしていく。

（落ち着け、まだだ。チャンスを逃すな。）

ダイはスヴァルティアの攻撃を避けながらエミリアの姿を確認した。
そして、エミリアは目を開いた。

「ダイ！いけるよ！」

「よしっ！」

スヴァルティアが巨大な斧を振り上げた瞬間、ダイはスヴァルティ

アの足下に向かって全速力で駆け出した。
そして、スヴァルティアの右足目掛け……

「はあっ！」

全力のソードの一撃を放った。

片足に強烈な一撃を受けたスヴァルティアはバランスを崩し、その場で膝をついた。

「エミリア！」

「やあああっ！」

そこに最大パワーのフォイエが放たれる。

エミリアの放ったフォイエは巨大な爆発音と共に、スヴァルティアの頭部に直撃した。

そして、スヴァルティアはそのままゆっくりと倒れていった。

しばしの静寂の後……

「……倒し……たの？」

倒れているスヴァルティアの位置からゆっくりと歩いて来るダイにエミリアは尋ねた。

「……はあ……はあ……。生き……。てる……。？あたし、生きてる……」

「ああ、五体満足で立ってるよ。」

壁に寄りかかったダイはエミリアにそう答えた。

「やった、やったよ！あんなでっかいのを倒しちゃった！」

ようやく実感が湧いたのか、エミリアは小さな子供のように喜びました。

「喜びすぎだ。跳びはねるなよ。」

「すごい！本当にすごい！あんたを信じてよかった！やった、やったあ！」

ダイは喜びを体全体で表現するエミリアを見てため息をついた。そのため息は呆れたため息ではなく、安堵のため息だった。

「ねえ、ダイ！あたし、頑張ったよね！？」

「そうだなあ……。ま、よかったんじゃないか？まだまだ訓練の必要はあるが、上出来だ。」

「そう？ダイにそう言われると自信が……。ん？」

エミリアは違和感を感じた。

スヴァルティアを倒してから、ダイのしゃべり方が変化していることに。

「ねえ、ダイ。」

「ん、なんだ？どうかしたか？」

「……しゃべり方。」

エミリアのその言葉の意味をダイはしばらく理解出来なかった。

「……あ。」

ようやく理解したのか、ダイはわざとらしく咳ばらいをした。

そして、何事もなかったかのように倒れているスヴァルティアの向

こつ側にあるトビラに向かって歩き始めた。

「……さて、出口を見つけないければな。」

「ちょっと、無視しないでよ！さっきのしゃべり方はなに！？どう
いうことなのよ！」

「……なんのことだ？」

「とぼけるな！さっきの優しいしゃべり方よ！あれが素なの！？答
えなさいよ！」

ダイの後ろを歩くエミリアは何度も質問を繰り返した。

倒れているスヴァルティアの横を通り過ぎた所で、ダイは足をとめ
た。

「あー、もう！わかった！」

ダイは半分やけくそな声をあげると、振り返り質問に答えようとし
たが……

「さっきのが……っ！？」

エミリアの後ろで立ち上がったスヴァルティアが視界に入り、言葉
を止めた。

すでにスヴァルティアはエミリアに狙いを定め、腕を振り上げてい
た。

ダイは後先の事を考えずにエミリアを突き飛ばした。

「えっ？きゃあ！」

エミリアは何が起きたのかわからない顔をしていたが、起き上がっ
てダイの姿を見た瞬間青ざめた。

ダイの体はスヴァルティアの攻撃によつて吹き飛ばされていた。

「ダイ！」

エミリアはすぐにダイの下に駆け寄つた。

ダイの体には深い爪痕が刻まれ、そこから大量の血がとめどなくあふれ出ていた。

「……………いや、やだよ……………」

エミリアはそうつぶやいて、目の前で起きた事を否定し始めた。
ダイはすでに動きを止めていて手遅れな状況にあった。

「……………どうして、あたしなんか……………かばつて……………。……………起きて、起きてっばー！」

ダイの体を揺さぶるが、その体はピクリとも動くことはなかった。

「……………どうして？どうして、みんなあたしを置いてっちゃうの？……………お願いだから、目を開けてよ！あたしを一人にしないでよ！」

涙を流しながらそう叫ぶエミリアにスヴァルティアは容赦なく腕を振り上げる。

その腕がエミリアに向かって振り下ろされる。

「誰でもいいから……………助けてよお！」

そう叫んだ瞬間、突如エミリアの体が輝きだした。

エミリアからあふれてくる光を浴びたスヴァルティアは一瞬の内に消滅してしまった。

エミリアはそのまばゆい光をまとったまま宙に浮き、ダイに近づいた。

『あなたを、死なせはしません。』

先ほどまでの少女の声とはちがう大人びた声を発し、ダイの体をその光で包み込んだ。

第1章 Act 1

〈翼を抱いた少女〉（後書き）

第1章 Act 1

《翼を抱いた少女》

終了です。

ゲームの流れを文章にするのは難しいです……。
ご意見などは遠慮なくどうぞ。

次回は

第1章 Act 2

《明かされる真実》

となります。

戦闘シーンはないです。更新はできるだけ急ぎます。

第1章 Act 2

〈明かされる真実〉（前書き）

ようやく、更新できました。長いです……

ゲームをプレイしながら執筆しているのですが、
区切りがわからず、気がつけば……

途中にある説明などは、前話と同様に作者の勝手な解釈です。

第1章 Act 2

〈明かされる真実〉

彼は夢を見ていた。

消し去りたい過去の自分の夢を……

「さすがは英雄。期待されているな。」

……俺は英雄なんかじゃない。期待される資格などない。

「あなたは、世界を救った英雄です。」

……救えてなどいない。俺が救えたのはほんの一握りだ。

「お前は強くなった。英雄と呼ばれるだけのことはある。」

……強くなんかない。俺は、弱い人間だ。

どうして、俺を英雄などと呼ぶんだ？

どうして、俺に期待なんてするんだ？

どうして、俺は……

この世界にやって来たんだ……？

「同伴は難しいネ。」

(……ん、なんだ?)

声が聞こえダイは目を覚ました。

「ウン、ウン。デモ、気持ちトテモ嬉しいヨ。」

(……誰か、いる?)

近くでだれかが会話しているようだが、目を覚ましたばかりでまだ意識がはつきりとしていないダイにはそれが男性なのか女性なのかも判断できなかつた。

「ジャア、マタネ。」

会話を終えたその人物は、ダイが目を覚ましていることに気がつき真上からダイの顔を覗き込んだ。

「オウ！気がついたネ！」

目覚めきっていないダイの視界に入ってきたのは色白の肌と明るい緑色の髪。

そして、男性の体とは違う胸部の膨らみ……

(……女だ。)

ダイはその人影が女性だと確認した。

「チヨト、待ッテテネ。」

完全に目を覚ましたダイは、その女性の耳が機械で出来ていることからキャストだということもわかつた。

「シャツチヨサン！お客サン、起つきシタヨ！シャツチヨサンも起つきシテヨネ！」

「あー……」

今度は遠くから男の声が聞こえた。

とりあえず、自分の身が安全なのかどうかをダイは心配した。

ダイは体を起こしてまわりを見渡すが、そこは見覚えのない施設だった。

「お客サン、リトルウィングへヨウコソ」

「リトルウィング？……ここのことか？」

「ワタシ、チエルシー。ヨロシクネ。」

「無視か……」

あまりにも華麗なスルーにダイはペースを崩された。

「リラックスしててイイノヨ。ボツタクリの店じゃないからネ」

「いや、あんたのそのしゃべり方が余計に心配にさせるんだが……」

「シャツチヨサン、もうすぐ来るからネ。」

「……………」

二度目の華麗なスルーにダイはもう何も言わなかった。言っても無駄だと察したのだ。

「シャツチヨサン！お客サンがお待ちヨ」

「まあ待てつて、今通信中だ。……おう、俺だ俺。今すぐ俺んとこまで来い。……ああ？イヤだ？甘えてんじゃねえぞ！」

遠くからそんな声が聞こえ、ダイは自然に警戒を強めた。

ダイのそんな姿を見た先ほどのキャスト、チエルシーは警戒心を解くためか話を始めた。

「アラアラアラ、それじゃ、ワタシから軽く説明ネ」

チエルシーはようやく今いる場所の説明を始めた。

ここはリゾート型コロニー『クラッド6』と呼ばれる場所で、その中にある民間軍事会社『リトルウィング』の事務所、との事である。

「アナタ、シャッチョサンが連れて来たお客サンネ。」

「……シャッチョサン？」

「ウチで一番エライ人ネ。」

「……社長さん、か？」

「ソウ、ソレソレ。アナタ、いままでずっと眠っていたのヨ。ぐっすり、すやすや。寝る子は育つって感じダッタネ。」

「……眠っていた？」

ダイはふと自分の胸に手を当ててみる。

体にも服にもキズ一つ存在しない。

（治療されたわけじゃない……。いや、治療したとしても助かるよ
うなキズじゃ……）

ダイは疑問に思うことばかりで少し頭が混乱し始めた。

「よーお、気分はどうだ？」

先ほどまで通信をしていた男が通信を終えたようで、ダイのいる場所まで近寄り声をかけてきた。

その男は獣のような耳をしていることからビーストだとわかった。おそらくこのビーストの男がチエルシーの言っていた、シャッチョサンなのだろう。

(この男、どこかで……)

「おうおうおう、面白いぐらいわけがわからないって顔してるな。」

「ええ、できれば状況を説明してもらえると助かるんですけど……」

一応、社長と呼ばれている男が相手なので念のために敬語を使用したのだが……

「あー、不慣れな敬語なんか使わなくていい。ここはそんなに上下関係とか気にしてねえんだ。普段通りでいい。」

ダイナりの礼儀はすぐに無駄となった。

「……説明を頼む。疑問に思うことが多い。」

「そのしゃべり方の方がお前さんに合ってるぜ。んじゃま、軽く説明でもしておくか。」

ビーストの男は近くの椅子に腰かけ話を始めた。

「俺は、クラウチ・ミュラー。この軍事会社、リトルウィングを取り仕切ってるモンだ。」

「ダイト・アーディガン。フリーの傭兵だ。」

お互いに名前を名乗ると、クラウチはさらに口を開いた。

「ま、軍事会社といっても肩書きだけで、やってる事はそこらの便利屋とたいして変わらねえ。要人警護とかシヨボいもんばかりさ。んで、レリクスの調査にもたまたま参加してたってわけだ。いろいろあって、レリクス内に閉じ込められたバカ二人を救出する任務に切り替わっちまったけどな。」

そこまで言われてダイは察した。

レリクス内に閉じ込められたバカ二人……

「その救出されたバカの一人がお前さんだよ。」

「……ああ、記憶は曖昧だがその通りだ。」

「しかも、身元の確認もとれないときだ。」

身元の確認と言われた瞬間、ダイはピクリと反応したが、とれないと言われた時には内心ホツとしていた。

（素性は知られてないか……。とりあえずは安心……。か？）

「しょうがねえから俺が引き取る形でいったんここまでご招待、つてわけよ。」

「……思い出した。あんた、あの時レリクスでエミリアといっしょにいたビーストか。」

「お、やっぱあいつと知り合いだったか。」

「まあ、成り行きでな……。」

曖昧だった記憶が徐々によみがえり始めた。

「随分と世話になってしまったようだな。」

色々と気になることはあったが、ダイはひとまず助けられたお礼を言った

。ダイのお礼の言葉を聞いたクラウチは笑いながら答えた。

「気にすんな気にすんな。こっちもわりと下心があるからよ。」

「……下心？」

どういうことかとダイが聞こうとした時、トビラから通信音が聞こえた。

「どうやら誰かが来たようである。」

「お、ちょうどいいタイミングだな。さっさと入って来い。」

クラウチが入室の許可を出すとトビラが開いた。

そして、そこから一人の少女が入ってきた。

その少女の姿にダイは見覚えがあった。

「…………あのさ、おっさん。今日ぐらいカンベンしてよ。あたしがどういう状況だったか知ってるでしょ？」

入ってきた少女、エミリアは暗い表情でそう主張した。

「知らねえし、興味もねえからカンベンもしねえよ。それよりお前、客の前でそんなツラするんじゃないよ。」

クラウチはダイの方を見ながら忠告した。

「…………えっ？あつ、は、はじめまして！…………って、どこかで見たよ
うな…………」

クラウチの視線を追い、ダイに気づいたエミリアは挨拶をしたが、顔を確認すると首を傾げた。

「奇遇だな。俺もお前をどこかで見たことがあるぞ。」

ダイは冗談まじりに言ってみる。

「え……？えええーっ！あ、あんたは……！」

ようやく認識できたようでエミリアは大声で驚きの声をあげた。

「い……生き……てる？なんで、生きつ……生きてるの！？なんで、おっさん!？」

混乱しているエミリアはクラウチに答えを求めた。

「勝手に人を殺すんじゃないよ。お前、ほんとに適当なことしか言わねえな。」

「ていうかおっさん、生きてるの知ってたんなら教えてよ！」

「……なんで生きてるかは俺が知りたいがな。」

ダイは自分の胸に手を当て、何も問題がないことを再確認する。問題がない、ということが問題だった。

「でも、よかった……よかったあ……。あたしも気を失ってて、気がついてたらここにいたしさ……。あそこで起きたことって全部、夢だったんだ……。よかったあ……」

エミリアは心の底から安堵した。

しかし、ダイはどうしても納得することが出来なかった。

(夢……。本当にそうなのか……?)

もしも夢だったならば、体や服にキズ一つないのは納得できるのだが、ダイはレリクス内での出来事をその一言で済ませることができなかった。

そんな二人をクラウチは腕を組んで頷きながら見ていた。

「よしよし、狙い通り。エミリアも懐いているし、好都合だ」
「狙い通り？好都合？……なんのことだ？」

ダイはクラウチの言葉が気にかかり聞いた。
すると、クラウチは椅子から立ち上がりダイの方へ向き直した。

「お前さん、フリーなんだろう？丁度いい、このままうちの会社に入
つちまえ。」

「……は？」

「はあ！？おっさん、急に何言ってるの！？」

いきなりのスカウトに二人はそれぞれの反応を見せた。

「お前とは話してねえよ、黙ってる。」

「ぐぐぐ……」

エミリアはいろいろと言いたそうだったが、仕方なく黙った。

「うちはたしかに小さな会社だが、お前みたいな経験者にはボーナ
スもはずむぜ？今なら、『いないよりはマシ程度のパートナー』も
つけてやるよ。」

(なぜ強調した……。まあ、大体予想はできるが……)

ダイはチラリとエミリアの方を見た。

タイミングよく呼び出されたエミリアと先ほどクラウチが口にした
言葉も含めて考えれば、カンのいい者はわかるだろう。

「へえ、めずらしく太っ腹だね。」

エミリアはそのことには一切気づかず、素直にクラウチに感心していた。

「なに人ごとみたいに言っただけやがる。お前のことに決まってるんだろうが。」

「ふーん……って、ええっ!?!」

『いないよりはマシ程度のパートナー』はようやく理解したようである。

「どうだ？試験もなしで、パートナーつき。いい条件だと思うぜ。」

「……傍から見ればな。」

そういうとダイはしばらく考えた。

たしかに自分もそろそろフリーであることに限界を感じていた。今までは、様々な場所を旅しながら所々で依頼をこなして過ごしてきたのだが、ここ最近はレリクスのような経歴を問わない依頼が減ってきているのである。

この勧誘は戦力アップを目的としたエミリアの厄介払いのようだが、レリクス内で見えたエミリアの腕前は思ったより悪くない。

ダイが問題視しているのはパートナーのことではなく、自分の素性が周りに知られてしまうことであった。

自分がある事件と関わりがあることを知られると面倒なことになる。

「入社するかどうかは後として、一ついいか？」

考えた結果、ダイは一つ質問をすることにした。それは、条件とも言える内容だった。

「俺の身元、経歴は不明のままでもいいか？」

遠回しに「俺の過去を調べるな」とでも言っているようだった。普通の軍事会社ならば無理だっただろう。

しかし、このリトルウィングは普通の軍事会社ではなかった。

「ああ、かまわないぜ。元々、ここはそういう奴らが多くいるからよ。前科持ちだろうと腕があればそれでいい。」

普通ではなく異常だった。

どんな経歴があるかと受け入れるのがこの会社らしい。

(こない加減な会社なら、素性が明らかになるとは思えないな……)

結局、ダイは入社を決意した。

「よし、決まりだな。よろしく頼むぜ。」

入社を決めるとクラウチは、もう部屋も用意してあると言い出したので後には引けなかった。

「おい、エミリア。ダイを『マイルーム』に案内してやれ。パートナーなんだから、仲良くな。」

「ちよつとおっさん！パートナーとか勝手に決めるな！あたしの意見も聞いてよ！」

今まで黙っていたエミリアがようやく口を開いたが、クラウチにその意見を聞く気はなかった。

「……ほお、それはつまり一人で働きたいってことか？」

「う……そういうわけじゃ……」

「偉そうなクチは一人で稼げるようになってから叩け！おら、返事は！」

「うー……」

クラウチの勝利宣言とも言える言葉にエミリアはしばらく唖っていたが、なにも言い返せずに観念した。

「はあ……わかったよ。それじゃ、あたしは先に居住区の入りに行ってるから……」

そういうとエミリアは思い足取りで部屋から出て行った。

閉まったトビラを眺めながらクラウチはひとりごとのように口を開いた。

「……ったく、返事ひとつマトモにできねえのか、あいつは。」

「シャツチヨサン、怖い顔するからネ。もっと優しくしてあげるとイイヨー。」

「なんでロクに働かない社員に優しくしてやんなきゃいけないんだよ。なあ、お前もそう思わねえか？」

クラウチはダイに向かって意見を求めた。

「……俺に聞くなよ。」

急に話をふられたダイは即座に言った。

働かない部下を持つ上司の気持ちなどダイには理解できなかったが、とりあえず質問には答える。

「厳しくするのもいいが、少しは優しさも必要じゃないのか？」

「なんで関係のないガキをそこまで甘やかさなきゃいけないんだよ。」

「関係のない……？」

「まさか、エミリアと俺は家族とでも思ってたのか？ハッ、とびきりの冗談だな、そりゃあ。」

クラウドは不機嫌そうに言い放った。

正直、家族ではないにしても何らかの関係はあるだろうとダイは思っていた。

「勘違いしているようだから、あらかじめ言っておくぞ。俺とエミリアは家族でも何でもねえ。ただの上司と部下の関係だ。」

「そんな、ツレナイネー。シャツチヨサンは、あの子の保護者でもあるの二。」

クラウドの言葉に対して意見を述べたのはチエルシーであった。

「ツケのかわりに、お前と子ども押し付けられただけじゃねえかよ。」

「お店が潰れる直前まで来てくれたのシャツチヨサンだけヨ。ワタシとエミリアを引き取ってくれて感謝感謝ネ。」

チエルシーは屈託のない笑顔で話した。

詳細はわからないが、どうやらチエルシーとエミリアはクラウドのおかげでここに居るようである。

「あー、話が進まねえな。ともかく、俺とエミリアは家族なんかじゃねえ。だが、書類上じゃ俺はエミリアの保護者ということになっちゃまってる。そうでなければ、うるさいだけのガキなんてとっくにほったらかしてやる。」

「仕方ないヨー。最初は誰でもわからない事だらけヨ。」
「まあ、あいつの過去とかはどうでもいい。正直そんなことに興味はねえしな。」

クラウチははつきりと言いきった。

ひどい言い方だが、ダイはその考えのすべてを否定できなかった。過去を知り、人の気持ちを理解しているかのように同情される事は、ダイにとって不愉快な事である。

「いいか、お前さんの第一の仕事はエミリアのお守りだ。タダ飯喰らいじゃなくなる程度に使えるようにしてやってくれればいい。後は好きにしてくれ。」

「……本人のやる気が問題なんだがな。」

エミリアの仕事嫌いは相当なものである。

本人にやる気がなければ使えるようにする以前の問題である。

「ま、そこらへんはお前さんがなんとかしてくれ。じゃ、頼んだぜ。」

そういうと、クラウチは自分のデスクまで戻ってしまった。

「はあ……。不幸だ……。と。」

取り残され、そんな言葉をつぶやいているダイにチエルシーが話しかけた。

「シャツチヨサンはああいつけどエミリアはいい子ヨ。」

「そうならいいが……。」

「仲良くしてもらえると、ワタシもウレシイ。あの子もウレシイ。」

みんなウレシイ。」

チエルシーはまた屈託のない笑顔でそう言った。
誰よりも一番嬉しいのはチエルシー自身なのではないだろうか、と
ダイは思った。

「さ、さ、お客サン。エミリアは居住区の入口でお待ちヨー。レデ
イは待たせちゃいけないネ。」
「仕事だからな。善処はする。」

そう言つてダイは部屋から出て行つた。
ダイが部屋から出て行つたことを確認したチエルシーは……

「ダイト・アーデイガン……。あの顔、どこかで見たとある気がするのよネ……」

そんなひとりごとをつぶやいていた。

「居住区はどこだ？」

事務所から出たダイは居住区の場所を聞いておかなかったことを後悔していた。

考えれば、自分のいる場所がどういう場所かもわからない状態で目的地向かうのには無理があつた。
とりあえず、直進していると……

「む、お前は……」

聞きおぼえのある声がダイの足を止めた。

「あんたは、たしか……」

「あの時、海底レリクスで会ったな。覚えてるか、俺のことを。」

声の主は海底レリクスでダイが出会ったキャストであった。

「まさか、入社してすぐに知り合いに会うとはな……」

「そうか、お前もここに入ったんだな。俺は、レリクスの救助活動を手伝ってる際にクラウチから声をかけられてな。」

「そんな簡単に入れるんだな、ここは……」

ダイは改めてリトルウィングの、というよりクラウチのいい加減さを実感した。

「そういえば、自己紹介がまだだったな。俺はバスク。一緒に仕事をする機会があるかもしれんが、その時はよろしく頼む。」

「ああ、こちらこそ。俺はダイト・アーディガンだ。ダイとでも読んでくれ。」

二人は軽い自己紹介と握手を交わした。

すると、バスクが口を開いた。

「ところで、ここでなにをしているんだ？この先にあるのはバトルショップだが……」

バトルショップとは戦闘に関わる武器や回復薬といったアイテムを販売している場所である。

これから先、何度も足を運ぶ場所になるのだが、今のダイには関係

のない場所だった。

「居住区に向かうところだったんだが……」

「居住スペースは向こうだ。緑のトビラがあるだろう。」

バスクの指差した方を見て、ダイはようやく場所を確認できた。

このリトルウィングは中央のロビーからそれぞれのエリアへ移動できるようになっていて、居住区は事務所の一つ隣のエリアであり、ダイが向かっていた方向とはほぼ逆の位置である。

「……………」

「なんだ、方向オンチなのか？意外なところがあるんだな」

「いや、場所を把握していなかったただけだ。すまない、礼を言う。」

「ああ、気にするな。」

バスクに礼を言ったダイは、間違いなく居住区に向かって歩きだした。

場所を把握したダイが迷うことなく居住区に向かっていると、一人の女性に声をかけられた。

「見ない顔だな。」

「ついさっき入社したばかりだからな。」

「……ということは、久々の新入社員か。ふむ、ようやくクラウチも動いたようだな。」

青髪で赤い服を着た女性はそれを確認すると、ダイに向かって手を

差し出した。

「私の名はクノー。リトルウィング所属のものだ。君にとっては、先輩となるのだろうか。」

「ダイト・アーディガンです。」

クノーの手を握りながらダイは自己紹介をした。

先輩、ということと敬語を使用したのだが、ここでは無駄となる。

「堅苦しいな。普通に喋って構わんぞ。ここに上下関係はないに等しいからな。」

握手を済ますとクノーはそう言った。

それは、ここで敬語は使わない、とダイが決意した瞬間であった。すると、クノーは真剣な表情をしてダイに話し始めた。

「……腕に自信がないのなら、早々に去ったほうがいい。自信があるのなら、好きにするといい。」

「だったら、好きにさせてもらうが……？」

ダイが表情を変えずにそう言うと、クノーは笑みを浮かべた。

「ふふ、今のは軽い脅しのつもりだったんだが、まったく動じないところを見ると、君は自信があるほうなのだろうな。」

「少なくとも、死なない自信はある。」

「言うものだな。君が敵対しない限り、私は君の味方だ。いつでも話しかけてくれ。」

「そうさせてもらう。それじゃ、人を待たせてるのでな。」

「そうか、すまなかったな。」

クノーに別れを告げ、ダイはその場を去った。

「……あ、やっと来た！遅いよ！！」

居住区に到着したダイを待っていたのは用意された部屋の前で立っていたご機嫌ナナメのエミリアだった。

「話が長引いたんだ。色々とな。」

迷っていた、とは言えなかったダイは適当に答えた。

「ちゃっちゃと終わらせて、あたしは眠りたいんだから、早く来てよねー！」

そう言って、エミリアは部屋の中に入って行った。

「いい子……か。」

チエルシーが言っていたことに対して小声でそうつぶやいてから、ダイはエミリアの後を追うように部屋の中に入って行った。

「ま、基本的な使い方はこんなところかな。」

エミリアのマイルームの説明が終わった。

説明と言っても、どこになにがあるか程度なのだが、ダイはとりあえずそばのビシフォンを見ていた。

ビシフォンとは、様々な情報を見ることが出来る情報端末である。

「あとはテキストに使ってみるといいよ。その間、あたしは休んでるからさ。」

そう言いながら、エミリアは部屋のベッドに腰かけた。

「……………ふわぁ〜。やば……………ホントに眠くなってきた……………」

「エミリア、これは……………っておい……………」

質問しようとしたダイの目に入ってきたのは、ベッドで横になって眠っているエミリアの姿だった。

「……………つたく、説明はどうした。」

そう言いながらもダイはそばに用意されていた毛布を眠っているエミリアにかけた。

「そういえば、パートナーマシナリーが用意されているんだな。」

ダイは部屋の隅に用意されているパートナーマシナリーに目をやった。

ダイの身長的一半ほどしかないパートナーマシナリーは少女の姿をしていた。

あくまで見た目が少女なだけであり、主をサポートするために生み出されたアンドロイドのようなものである。

ちなみに、髪の色はダイと同じ赤色をしていた。

「はじめまして、マスター。これより、マスターのパートナーマシナリーとして働かせていただきます。」

起動させると、パートナーマシナリーは礼儀正しくお辞儀をした。

「ああ、よろしく頼む。俺の名はダイ。お前の名前は？」

「はい、R 23と申します。」

「いや、それは名前じゃない。」

「そうなのですか？しかし、私の名前と言えるものはこれしかありません。」

「そうか……。……だったら、名付けるか？」

ダイはそう提案した。

正直なところ、呼びにくいというのが第一の理由だった。

「マスターがそうされたいのならば、私は構いません。」

「……読む人が困るからな。」

「……………」

「なんでもない。そうだな……………」

いざ、考えてみると中々思い浮かばないものである。とりあえず、一番に目に入る赤色から連想して考える。

「赤……。烈火、レッカはどうだ？」

「レッカ……ですか？」

「赤いイメージからなんだが、却下か？」

「いえ、気に入りました。」

表情は変わらないが、嬉しいようである。

こうして、R 23改めてレッカは、ダイのパートナーマシナリーとなった。

一通りやるべき事を済ませたダイは、リトルウィングの中を見て歩

「……と部屋から出ようとした。

『……待つて。』

「……っ！？誰だ！」

突如、大人びた女性の声が聞こえ、ダイは声のした方向を向いた。ダイの目に入ったのは、主の急な叫びに驚いたレツカとベッドでぐっすりと眠っているエミリアだけだった。

『ここでなら、二人で話が出来そうだから……』

「どこだ！？どこにいる！？」

その時、眠っているエミリアの体から光が放たれた。エミリアから放たれるその光の中から一人の女性が現れた。

「……誰だ？」

ダイは内面の動揺を表情に出さずに尋ねる。すると、女性はゆっくりと口を開いた。

「私はミカ。訳あって、この子に宿る意識のみの存在です。この姿も、状態も、すでに失われた技術によるもの。失われた技術を旧文明のものとするれば、私は『旧文明人』となりますね。」

「……何を言っている？」

「その疑念は当然のこと。ですが、どうか最後まで私の話を聞き届けてください。頼りになるのは、貴方だけなのです……」

ミカは何よりも真剣な表情でダイに頼む。

そんなミカの姿を見て、ダイはひとまず話を聞くことにした。

「色々と聞きたいことはあるが、今は後回しにしておく。」

「はい、ありがとうございます。」

「それで、話つてのは……」

「あの、マスター？」

ダイの言葉を止めたのはレツカだった。

無表情なのだが、少し困っているような表情をしている様に見える。

「レツカ、なんだ？」

「非常に申しにくいのですが……」

「どうした？遠慮せずに言ってみる。」

ダイの許可をもらったレツカは口を開いた。

「……マスターは、誰と会話をしているのでしょうか？」

「……なに？」

レツカに指摘され、ダイは疑問の表情でミカを見る。

すると、ミカはその疑問に答えた。

「私の姿は、普通の方には見えません。姿だけでなく、声も……」

つまり、今のレツカの目には誰もいない方向を見ながら会話をしているダイの姿が写っているわけである。

これ以上、レツカにかわいそうな目を向けられないために、ダイはレツカに話しかけた。

「レツカ、しばらく席を外してくれ。どうも疲れているようだ。」

「かしこまりました。ご用の際は声をかけてください。」

そう言って、レッカは自身のパワーを切った。

「さて、それじゃあ話してくれ。」

ダイはそばの椅子に腰かけ、ミカを見る。

そして、ミカは話を始めた。

「三年前、グラール太陽系を襲った危機。SEEDの襲来。……それは、私たちの時代にも起こったことなのです。」

遙か昔、旧文明が栄えていた時代。

私たちは、突如襲来したSEEDにより滅亡の危機へと陥りました。

長い長い戦いの末、私たちはついにSEEDの元凶である『ダークファルス』の封印に成功しました。

しかし、その頃にはすでに三惑星の大地はSEEDに汚染されており、回復は不可能な状態でした。

……そして、旧文明人の肉体もまた、同じようにSEEDに汚染されていたのです。

このままでは、星も人も滅亡するのは時間の問題でした。

そこで、旧文明人は賭けに出ました。大いなる時を越える『復活計画』を……実行に写したのです。

まず、SEEDに対する強力な浄化をこのグラールすべてに対して行い、三惑星をよみがえらせ……次に、新たな『ヒト』の素体を造りあげ、それを大地に放ちました。そして、旧文明人は……汚染された自らの肉体を捨て、精神だけの存在となり、長い眠りについたので。新たに造り出した『ヒト』が高度な文明を築きあげたとき、『その体を奪い、復活する』ときまで

計画は実行に移され、造り出された『ヒト』たちは高度な発展を遂げていきました。

旧文明人の精神が眠る場所への繋げてはならない道を開くことできてしまうほどに……

「……旧文明人によって生み出された『ヒト』とは……」
「俺たち『ヒューマン』のことか。」

ダイは何も言わずにミカの話聞いていたが、流れからわかったことを口にした。

「すべて……旧文明人の思い通りになった……。そして、もうすぐその時が来るとのことか……。」
「……どうか、この忌まわしい計画を阻止するために、手を貸していただけないでしょうか。この子は……心を閉ざしきっていて、私の声を認識してくれないのです。」

「質問、いいか？」

「……はい。」

大体の話を聞いたダイは思い浮かんだ疑問をミカに尋ねる。

「なぜ計画を阻止するんだ？あんたも旧文明人なんだろう？」

「たしかに私は旧文明人ですが、現代への回帰を望んではいません。私たちは、滅ぶべくして滅んだ。世界は次の世代に任せるべきなのです。」

自分の運命を受け入れた彼女の決断だった。

それならば、ダイも言うことはない。

ダイはもう一つの質問をした。

「もう一つ。さっき、あんたは、私の姿は普通の人には見えない……って言ったな。」

「……はい。」

「……俺は普通じゃないということか？」

ダイはこの疑問に対して二つの原因を推測していた。

一つは、エミリアが言う夢……

そしてもう一つは、過去の自分……

ミカは少し黙っていたがゆっくりと口を開いた。

「……貴方にとって、私の存在は他人事ではないのです。」

「……」

「なぜ、縁のないはずの私と貴方が話すことができるのでしょうか……？そして、あのレリクスで自律機動兵器に襲われたのは本当に夢だったのでしょうか……？」

「……」

「……貴方は、生きていますのでしょうか？」

ダイの推測の一つが的中した。
最初から感じていた疑問が解決される。

「……やはり、あれは夢じゃなかったか。」

「……はい。貴方の肉体は、自律機動兵器に碎かれて一度は完全な死を迎えました。その時、エミリアの強い願いによって発現した私のプログラムが貴方の体を再構築しているのです。こうして話している、今も……」

ミカは少し悲しげな表情でダイに真実を伝えた。

「それと……」

「まだあるのか？」

もう何を言われようと、驚きはしなないと思っているダイは、ミカの言葉を聞く。

「すみません。あなたの体を再構築する際に、あなたの記憶を……」

「……ふぁ……」

「……！そろそろこの子が目を覚まします。詳しくはまたいずれ……」

エミリアが目を覚ます前にミカは姿を消した。

それと同時にエミリアが目を覚まし、体を起こした。

「んー……ちょっと寝ちゃった、かな？」

「……」

「……ん？あのさ、なんでこっち見つめてるの？」

エミリアの中にいる旧文明人がついさっきまでそこにいたから、と

言うわけにはいかないダイは適当に嘘をついた。

「人の部屋で熟睡してる所を見てただけだ。」

「ちよっ……！寝てるのに気づいてたんなら起こしてよー！」

エミリアは顔を赤くしながら立ち上がった。

先ほどの旧文明人についての話をするべきかどうかダイが考えていると、エミリアが次の説明を始めようとした。

「それじゃ、次は『マイシップ』の説明かな。ロビーの中央から行けるようになってるんだ。ほら、行くよ。」

「先に行ってくれ。パートナーマシナリーの確認をしておく。」

「別にいいけど、早く済ませてよ。入口で待ってるから。」

そう言って、エミリアは部屋から出て行った。

エミリアが部屋から出たのを確認すると、ダイはレッカを起動させようとする。

「レッカ。」

ダイが名前を呼ぶと、数秒の間を空けてレッカが反応した。

「はい、マスター」

「少し話がある。信じがたい話だが、とりあえず聞いてくれ。」

パートナーマシナリーの確認はエミリアが眠っている間に済んでいる。

ダイがレッカを起動させたのは、先ほどのミカの話をするためである。

ダイはミカから聞いた話の要点をまとめてレッカに話した。

「たしかに、信じがたい話ですね。」

「……だろうな。」

「ですが、私はマスターを信じます。」

レッカはまっすぐにダイを見ながら言った。

なんだかその反応が意外で、ダイは少し驚いた。

「それで、マスターはどうされるのですか？」

「そうだな……。しばらくは様子見だ。」

仮に、ミカの話が真実としても、現段階ではどうすることもできない。

行動するのは、やるべきことをミカから聞いてからになるだろう。

「とりあえず、エミリアの所に行く。また文句を言われるのは避けたいからな。」

「かしこまりました。行ってらっしゃいませ。」

レッカに見送られ、ダイは部屋から出ていった。

一人になったレッカは、ベッドのシーツの乱れを直し始めた。

「私は、信じています。マイマスター。」

レッカは、自分の主に対してそんな事をつぶやいた。

第1章 Act 2

〈明かされる真実〉（後書き）

第1章 Act 2

《明かされる真実》

終了です。

ゲームではまだ続くのですが、ここで一旦切ろうかと。

主人公のキャラが微妙に定まっていないう気がしています……

次回は

第1章 後期

《パートナー》

第1章のまとめ、という感じですが、
各章の最後に入れていく予定です。

第1章 後期

〈パートナー〉（前書き）

遅い更新の上に
短くてすいません……

仕事の疲れか睡魔に負ける夜ばかりで……

よろしければ、読んでください。

「コレが仕事先に向かうための船。社用だから、大事に扱ってね。」

ダイはエミリアのマイシップについての説明を聞いていた。マイシップとは、要は小型船であり、中央に設置されている端末からそれぞれの惑星への移動を操作できるようになっている。

「つまり、基本現場へ向かうときは、このマイシップを使って移動するってわけ。これで一通り説明したけど、大丈夫？」

「ああ、問題ない。」

「……あのさ、さっきからあたしのおでこばかりジロジロ見てるけど、なんか付いてる？」

エミリアの説明の最中、ダイは何度かエミリアの額を見ていた。ミカが消える際にエミリアの額に吸い込まれていた気がしたため、つい確認してしまったのだ。

エミリアに変な誤解をされる前に、ダイはエミリアの体に旧文明人が宿っていることを伝えてみた。

「旧文明の人の意識が……あたしに宿ってる？」

もちろん、そんな話を信じるわけもなく……

「そんなわけないじゃん。それなら、なんであたしが気づかないのよ。」

はっきりと否定された。

予想通りの結果に、ダイはため息をついた。

「あー、もう。変な出来事は、あたしとあなたのレリクス体験記だけで十分。きつとアレもコレも全部夢よ、夢！レリクスでのことを思い出すぐらいなら、仕事をしたほうが百倍マシ！」

「……そうか。」

夢じゃない事をダイは知っていたが、その事についてはエミリアに告げなかった。

今のエミリアに何を言っても無駄だと判断したからだ。

「あ、この会社ではあたしのほうが先輩なんだから、きちんとつやまうようにね。」

どの辺りが先輩なんだ、という疑問は頭の端に置いておいた。
ダイは使わないつもりだったあのしゃべり方を使った。

「はい、わかりました。」

ちなみに、ダイが敬語を使うときと使わないときとの差は激しい。普段、口の悪い人が急に礼儀正しい言葉づかいを使っていたら違和感を感じるだろう。

つまり、ダイの敬語モードを見たことがないエミリアは……

「うわっ、だめだ！なんか気持ち悪い！」

……という率直な感想を述べました。

「……おい。」

「ごめんごめん、今の冗談！今までどおりの感じでお願いします。あたしも、そのほうが話しやすいし。」

結局、ダイが敬語を使うことはなさそうである。

「……で、さ。あの、あのときのことなんだけど。」

エミリアは言いづらそうに口にした。

あのときのこと、というのが何のことなのかわからないダイは、黙って次の言葉を待った。

「えっと、ええっとお……。なんて言えばいいのかな。」

エミリアは一息おいてから話し始めた。

「その……あんたがいなかったら、あたしはきっと、レリクスの中にずっと取り残されていたと思う。」

それは、二人がレリクス内に取り残された事についての話だった。

「それに、何よりもあたしの言うこと、信じてくれたし……」

レリクス内でエミリアが口にしたSEEDについての推測。

誰にも信じてもらえないと思っていた話をダイは信じた。

「……まあ、あれは夢だったけどさ。……夢でも、嬉しかったかな……」

そう話すエミリアにダイは少し驚いていた。

そんなダイの表情に気づいたエミリアは、少し顔を赤くした。

「ちょっと、あまりキョトンとしないでよ。言ってるあたしも恥ず

かしいんだから……」

「……いや、お前がそんなこと言うとは思わなかったからな。」

「あー、もう……。そうだ！あんたのことも話してよ。」

「俺のことか？」

「うん。だって、よく考えたらあたし、あんたのこと何にも知らないじゃん。」

「……………」

その質問にダイは黙ってしまった。

エミリアはそれを怒らせてしまったと思った。

元々、身元や経歴を明かさない、という条件でダイはリトルウィングに入社したのだ。

なのに過去を探るような質問をしてしまった事をエミリアは後悔した。

「ご、ごめん！話したくないなら別に……」

「何を話せばいい？」

「……………えっ？」

予想外の言葉にエミリアは驚いた。

ダイの表情は怒っている様子はなく、何でもない顔でエミリアに質問を返した。

「答えられる質問には答える。何が聞きたい？」

「え、えっと……。ここに入るまでは何してたの？」

あまり過去のことには触れない程度の質問をエミリアは考え、聞いた。

その質問にダイは答える。どうやら、この質問は大丈夫らしい。

「そうだな……。俺は……」

ダイはエミリアに旅の話をした。

ダイの旅の話を通り聞いたエミリアは次の質問をした。

「そういえばさ、どうして右手にだけ手袋してるの？」

エミリアはダイの右手を指さしながら聞いた。

少しの間を置いて、ダイはその質問に答えた。

「これは……傷を隠すためだ。」

「……傷？」

「ああ、旅の途中で負った傷だ。ちょっとした火傷だがな……」

「……そっか。」

エミリアはあまり触れないことにした。

そして、最後にこんな質問をした。

「あのさ……正直に答えて。あたしがパートナーで……迷惑？」

不安な表情を浮かべながら、エミリアはダイに尋ねた。

正直に言つと、心配な部分はあるが、ダイはそれを迷惑とは考えていなかった。

「……本当に迷惑なら最初に言っている。少なくとも、今はそう思っていない。要は、これからのお前次第だ。」

「……うん！今はそう言ってくれるだけで十分だよ！ありがとう！」

安心したエミリアは笑顔でお礼を言った。

それは、無邪気な子供のような笑顔だった。

「フッ……」

それを見て、何故だか笑みを浮かべてしまったダイだった。

第1章 後期

〈パートナー〉（後書き）

第1章 後期

《パートナー》

終了しました。

ようやく、第1章がおわりました……

これから先、続けていけるのか不安になっている作者です。

次回は

キャラ紹介でもしようかなと思っています。

オリキャラ紹介

ダイト・アーディガン(前書き)

オリキャラ紹介

ダイト・アーディガン編です。

「はじめに」で設定は載せてたんですが、改めてということとで。

前半はキャラ紹介、後半は質問タイムとなっています。

先に言うておきます。

後半はおふざけです。

オリキャラ紹介

ダイト・アーディガン

「名前」

ダイト・アーディガン

「愛称」

ダイ

「年齢」

20歳

「種族」

ヒューマン

「タイプ」

ハンター

「容姿」

赤髪で肩にかからない程度の長さ。

少し目つきが悪い。

体格は標準でそれなりに筋肉がついている。

身長は180センチぐらいで高め。

服装は黒系のジャツジメントコート。

右手には黒色の革グローブ。

「武器」

ソードが一番得意だが、近接武器ならばほとんど扱える。

テクニクは苦手。

射撃武器はツインハンドガン。

「紹介」

旅をしていたフリーの傭兵。
レリクスでエミリアと出会い、その場の流れで軍事会社リトルウイ
ングに入社する。

身元、過去の経歴、いずれも不明。

腕はかなりのもの。

グローブを右手にだけ着けている理由は「火傷の跡を隠すため」ら
しい。

「作者は」

ゲームで最初に作成したキャラです。

テクニク、射撃武器はほとんど使わないでいました。

得意武器のソードは

コクイントウ・ホオズキ（長い刀）をイメージしています。

作者「……というわけで質問タイムです。」

ダイ「……どういうわけだ？……というかあんた誰だ？」

作者「まあ、細かいことは気にしないで。」

ダイ「はあ……」

作者「んじゃ、キャストのBさんからの質問。」

ダイ「……誰だ。」

作者「『ダイは方向オンチなんですか？』だつてさ。」

ダイ「キャストのB……バスクか。」

作者「それで、実際はどうなの？」

ダイ「地図があれば、迷うことはない。知らない場所だと迷うことがあるだけだ。」

作者「……本当は方向オンチキャラにしたかったんだけどね。」

ダイ「……おい。」

作者「ただ、方向オンチだと旅できないでしょ？だから、なしにした。」

ダイ「……………」

作者「あまり怖い顔で見ないでくれ……………」

ダイ「こつちからも質問だ。」

作者「え？質問？」

ダイ「あんたの名前はなんだ？」

作者「名前？ここでは、『雪風の使い魔』だけど……………」

ダイ「なんでその名前でこの小説書いてるんだ？」

作者「うっ……！」

ダイ「その名前で書くんだったら、主人公が貴族の娘に召喚される話が合ってると思うんだが？」

作者「いや、その……」

ダイ「それに、明らかに青い髪の無口な子が大好きだろ？」

作者「うう……」

ダイ「凶星か……。だったら……」

作者「はい！それでは、これでキャラ紹介を終わりたいと思います！また次回！」

ダイ「逃げるな。」

作者「さようなら！」

オリキャラ紹介

ダイト・アーディガン（後書き）

結局、一つしか質問してない……

わかったことは……

「方向オンチではない」

「DSの部分あり」

……っぐらいですね。

次回は

第2章 Act 0

《初仕事》

できるだけ急いで更新します。

第2章 Act 0

〈初仕事〉（前書き）

前回と同じく短めです。

少々、作者の妄想が最初の方に出ています。

「はあ、疲れた……」

エミリアはそう言いながら自室のベッドにダイブした。

疲労の原因は先ほどまでやっていたダイとの訓練であった。

エミリアを働けるようにするのが、クラウチから言われたダイの仕事である。

それを思い出したダイはエミリアを指導することにしたのだった。

「うー、いきなり模擬戦とかありえないっつの……」

訓練内容は、ダイが相手の模擬戦。

やる気がないエミリアに戦い方を教えても無駄、と判断したダイはひとまずエミリアの実力を把握するために模擬戦を選んだ。

エミリアも最初は嫌がっていたが……

『一撃でも当てられれば、それで終わりにしてやる。』

……という挑発とも言える言葉にエミリアはまんまと乗ってしまった。

その結果は散々だった。

「一撃も当てられないまま二時間……。こっちはヘトヘトなのに、あっちは涼しい顔してるし……。」

改めてダイの強さを思い知ったエミリアだった。

「でも……」

エミリアは訓練が終わった後のダイの言葉を思い出した。

『……予想以上にいい動きだ。やはり、センスはあるな。』

そんなダイの独り言を聞いたエミリアは少し自信がついたのだった。

「……まあ、頑張ってみよう……かな。」

その後、エミリアはシャワーを浴びてから眠りについた。

不思議とその夜は、いつもよりも寝付きが良かった。

ちなみに、ダイがエミリアに聞こえるように独り言を呟いたということを知らない……

「さて、今日はどうするか……」

「……ねえ、今日もやるの？」

「当然だ。一度の訓練で終わるものか。」

「うー……」

ダイとエミリアはマイシップにいた。

ダイはこの日の訓練の内容を考えているが、エミリアはあまり乗り気ではないようだ。

その時、マイシップに設置されている通信機が鳴った。

「……ん？エミリア、この通信は……」

このマイシップは社用のため、ここに来る連絡は会社宛のものが多い。

入社したばかりのダイがその通信に出るわけにはいかないため、エミリアに対応を求めた。

「あ、うん。あたしが出るよ。……うわ、ヤなトコから連絡だ。」

エミリアは嫌そうな顔を浮かべながら、通信を開いた。

「……はい……はい。……ええっと、本人は今月のツケは払ったとか言ってたんですけど？」

小さな声で話しているエミリア。

通信の相手と内容がわからないダイは、通信が終わるのを待った。

「うー、ちよつとあたしじゃなんとも……。はあ……。すみませんけど。じゃあ、そう本人に伝えます。」

そう言っただけで通信を終えたエミリアにダイは聞いた。

「誰宛の連絡だ？」

「おっさんだよ。今は、家からの転送通信。おっさんが出ないときはあたしが出てるんだけど……。」

どうやら、クラウド宛の連絡は会社の方にかかってくるらしい。

「うちにかかってくる連絡って言ったら、おっさんが通う飲み屋のツケとかの催促ばかりで正直ウンザリするよ。おっさん、あたしには働けっというけど、自分は昼間っから酒飲んでばかりだし。」

「よく会社の代表が勤まるな……。」

後からわかった事だが、チエルシーがシャッチョサンと呼んでいる

クラウチは別に社長というわけではないらしい。
ダイも最初はそう思っていたが、社長は別の人物だとチエルシーから聞いた。

「まあ、とりあえず事務所までついて来て。おっさんに今の伝えなきゃ……」

エミリアは事務所に向かって言った。

ダイもその後続いた。

内心、訓練にならなくてよかったと思っているエミリアであった。

ダイとエミリアが事務所に入ると、チエルシーがニュースを見ていた。

「ハイ！グラールチャンネル5・ヘッドライン・ニュース。ニュースキャスターのハルです！今日のニュースをピックアップ・アップ！」

テレビに映っている女性ニュースキャスター、ハルが恒例の挨拶をした後、ニュースが開始する。

ダイとエミリアは、なんとなくニュースに目を向けた。

「着工より2年。先月、ついに完成した『亜空間発生装置』の完成式典が、パルムの同盟軍本部で行われました。式には、亜空間理論を確立した、『ナツメ・シユウ』代表取締役をはじめ、開発に加わった軍関係者や多くの企業が参加しました。」

ニュースの内容は、今グラールで問題となっている資源枯渇問題を解決するために提唱されている『亜空間航行理論』の事だった。

今回の実験が成功すれば、その計画が大きく前進することになるらしい。

『今日のグラールチャンネル5・ヘッドライン・ニュースはここまです。ニュースキャスターはハルでした。バイバーイ!』

そう言っつてニュースは終わった。

「ノー! ニュース、それで終わりナノ? 納得いかないヨー!」

ニュースが終わった途端にチエルシーがいきなり怒ったような声をあげた。

急な叫びに驚きつつもエミリアはチエルシーに聞いた。

「なんでいきなり怒ってるの?」

「今のニュース、スカイクラッド社が出ていないネ! 亜空間航行の計画にイッパイ出資してるんだヨ! ウチのいい宣伝にナルと思っただのニー!」

どうやら、今のニュースにスカイクラッド社の名前が出てこなかったことに怒っているらしい。

「スカイクラッド社はウチの本社じゃん。リトルウィングの宣伝にはならないって。」

「……それに、ここは小規模な会社だ。大手企業じゃなければ相手にされないだろう。」

ダイの言った事にエミリアはつい納得してしまった。

なぜなら、代表がアレ(昼間から酒を飲んでいるビースト)なのだから。

「あ、そういえば、シャツチョサンが二人に用があるって言ったネ。ニユース見ていてすっかり忘れてたヨ。」

「丁度いい。こっちも用があったからな。」

「シャツチョサンのトコ行くなら、ついでにコレもお願いネ。」

クラウチの元へ向かおうとしたダイに、チエルシーは数枚の紙を手渡した。

その紙には、大きめの文字で『領収書』と書いてあった。

「ランジェリースポット……。リッチベルベット……。ダグオラ・シティ店……」

「……ねえ、このいかがわしい領収書はなに？」

ダイが領収書に記入されている文字を読み上げると、エミリアがゆっくりとチエルシーに聞いた。

どこか怒りがこもっているような声だった。

「経費じゃ落ちないカラ、自腹ダヨって伝えてネ。」

「あのエロオヤジ……！ツケの払い忘れだけならず、経費のムダ無駄遣いもするか！」

エミリアはわなわなと震え始めた。

「ハイハイ、文句は奥でネ。」

チエルシーにそう言われた二人は、現在三本目のボトルを空けているクラウチのデスクへと向かった。

「ちょっとおっさん！……ってうわ、酒臭っ！」

デスクに近づいた瞬間、エミリアは鼻をおさえ、ダイは顔を背けた。

「よお、来たか。」

「来たか、じゃないっての！いつもの飲み屋からまた電話が来たんだよ！いいかげんツケを払って欲しい、って！」

「それと、これもあんた宛だ。」

ダイは領収書をデスクに置いた。

クラウドはそれを手に取り目を通す。

「こりゃあ資料の経費じゃねえか。どうしてダイが持ってんだ？」

その質問に答えたのはダイではなくエミリアだった。

「こないかがわしいものが経費落ちるわけないでしょ！常識で考えろ、常識で！」

「ああ？わかってねーな。こういう根回しも必要なんだよ。」

領収書の中にはキャバクラの店名が記されたものもあったのだが、ダイは口には出さなかった。

「まあいい、それよりも仕事の話だ。喜べ、お前たちにふさわしい仕事を見つけてきてやったぞ。」

そこまで言うと、クラウドは真剣な表情を浮かべた。

「こいつは緊急かつ、重要な依頼だ。急ぎ、探して欲しいヤツがいる。」

「人の搜索……？なにかの重要参考人とか、要人とか？」

エミリアが詳しい内容を聞くと、クラウチは淡々と答えた。

「うんにゃ。俺が前に金を貸したヤツ。つまるところ、借金の取り立てだ。」

なんとも拍子抜けな答えだった。

この時点で、ダイは真面目に話を聞くのをやめた。

「依頼主おっさんじゃん！そんなの自分で探しに行け！」

「……どっかのタダ飯食らいがレリクスでの仕事をボカったから口くたな依頼がこねえんだよ！」

「う……それを言われると……」

何も言えなくなったエミリアをわきに、クラウチは一枚の写真をダイに手渡した。

写真には初老の男性が写っていた。短めの白髪で頭にゴーグルを着けている。

ダイが写真を眺めていると、クラウチが補足説明を始めた。

「検索対象者の名は、ワレリー・ココフ。五十一歳、男性……種族はビーストだ。」

「場所は、わかっているのか？」

「ああ。ワレリーの船はモトウブのクロウドッグ地方と場所が特定している。とてもヤツには用事がなさそうなヘンピな場所だ。」

「場所までわかってるんなら、なおさら自分で行けばいいじゃん……」

ダイの少し後ろでぶつぶつと文句を言っているエミリア。

「何か言ったか、ごくつぶし？」
「なんでもないですー！」

エミリアはダイの腕を掴んだ。急に腕を捕まれたダイは驚き、
「うよりも疑問の表情を向けた。」

「……なんだ？」

「こんな酒臭い場所にいたら、飲んでもいないのに酔っちゃうーさ、
いいいこー！」

「引っ張るな……！」

エミリアに引っ張られながら、ダイは事務所を出た。

こうして、リトルウィングに入社したダイの初仕事は『借金の取り
立て』に決まった。

あまりにもくだらない依頼にダイは少々呆れていた。

この依頼が、後に巻き起こる大事件の始まりになるとも知らずに…

…

第2章 Act 0

〈初仕事〉（後書き）

第2章 Act 0

〈初仕事〉

終了です。

フリーミッションの部分の特訓ということにしてみました。

次回は

第2章

〈カーシュ族の少年〉

戦闘シーンをどうするか悩んでいます……

第2章 Act 1

〈カーシュ族の少年〉（前書き）

毎回不定期な更新ですいません……

戦闘シーンが苦手なくせに書いていたのが原因です。
慣れないことはするものではないですね……

よろしければ、読んでやってください。

第2章 Act 1

〈カーシュ族の少年〉

グラール太陽系の第三惑星、モトウブ。

三惑星中、最も厳しい自然環境を持っており、惑星のほとんどが砂漠化しているために赤色に輝いている。

非常に治安が悪く、ならず者が多いほか、生息している原生生物もその大半が凶暴である。

ダイとエミリアはマイシップに乗って、モトウブのクロウドッグ地方へと向かっていた。

そこには多数の船が停泊しており、クラウチの言うヘンピな場所とは思えないほどだった。

ダイはマイシップの運転を自動モードから手動モードにきりかえ、空いているスペースにマイシップを着陸させた。

「へえ、ダイって船の操縦も出来るんだ。」

「これが初めてだ。」

「……え？」

「降りるぞ。」

ア然とした表情を浮かべているエミリアを置いてダイはマイシップから降りた。

「いや、初めてなら初めてって先に言っつてよ！」

エミリアは大声で言いながらダイの後を追った。

マイシップを降りてからエミリアはしばらくダイに文句を言っていたが、ダイが『次からは気をつける』と言ったことでその場は解決とした。

「それにしても、おっさんはヘンピな場所って言ってたけど、そのわりに観光地並に船が多いじゃん。」

エミリアは周りに停泊している多数の船を見渡しながら言った。それに関してはダイも疑問に思っていた。

船の数が異常に多い。なにかあったとしか思えないほどに。

色々思うことはあるが、ダイはひとまずそれを後回しにした。

「こないっぱいのなかからワレリーって人、探し出せるのかなあ？」

本来の目的である『ワレリー・ココフの搜索』及び『借金の取り立て』をダイは優先した。

内容はともかく依頼は依頼、とダイは割りきっていたが、エミリアはそうは思えないようである。

「ていうか、なんであたしたちがおっさんの貸したものの取り立てをしなきゃならないのよ……」

「いちいち文句を言うな、キリがない。」

「経費じゃなくて、依頼まで私物化しはじめてるよ、あのおっさん。誰かガツンと言ってくれないかなあ……」

「そういうことは自分で言え。」

エミリアの愚痴に対してダイは適当に答えた。

「ムダムダ。おっさん、あたしのいうことなんか何一つ聞いてくれないもん。」

「誰が言っても同じ結果になると思うがな……」

「まー、仕方ないよね。おっさんにとってみれば、あたしはただのお荷物にすぎないもんなあ……。あーあ、どうしたらあたしの話を

聞いてくれるようになるんだろう……」

エミリアは落ち込んだ表情になってきた。

愚痴を言い始めると最後には落ち込みだすその覚えのある光景にダイはため息をついた。

「だったら依頼を成功させてみる。」

「そんなことであのおっさんが急に態度変えたりすると思う？それに、あたしは戦うのとか苦手だし、調査とかも……キライだしさ。」

調査は『苦手』ではなく『キライ』と言ったところが気になったダイだが、そこは聞き流し口を開く。

「何のために訓練をしていると思っている？」

「え？」

ダイの言葉にエミリアは驚いたような表情を浮かべた。

ダイは言葉を続けた。

「お前をただのお荷物にさせないための訓練だ。依頼ぐらいこなしてもらわないと困る。」

「え、えっと……」

「どっちにしろ、依頼をこなさなければ話すも何もないだろ。」

「……うん、そうだね。ワレリーって人を探して、あとはそれからだね。」

ダイの言葉でエミリアはわずかではあるが、やる気を出したようである。

ダイの言葉に流された、という方が正しいのかもしれない。

「……ん？ねえ、あれって人じゃない？」

エミリアの指さした方へダイは視線を向けた。たしかに離れた場所に人がいる。

向こうも二人に気づいたようで、こちらに近づいて来る。

近くまで来た所で気づいたが背が低い、というより体が小さい。

その人物を見た瞬間、ピクリと動いたダイにエミリアは気づかなかった。

「おい、お前たち。こんなところで何してるんだ。文化保護地区を見に来たって感じじゃなさそうだが……？」

「……え？子供？」

エミリアには子供の男の子にしか見えなかったのだろう。

エミリアがそう言った瞬間、少年（？）は不機嫌そうな顔をした。

「子供って……。まあ、言われ慣れてるけどよ……」

「だって、どう見ても……」

疑問の表情を浮かべているエミリアにダイが説明をする。

「おそらく、小ビーストだろう。たしかに子供に見えるが、実際は俺たちよりも年上だぞ。」

「ええっ!？」

驚きの声をあげるエミリアを無視して、ダイは話をもどす。

「すまない。俺たちは人を探しに来たんだが……何かあったのか？
これだけ船が集まってるとなると、普通じゃないよな。」

「俺たちも来たばっかで周辺を調べてるところだ。この辺りは誰も

いないみたいだけどな。」

たしかに、船の数に対して、人のいる様子がまったくない。これだけの数ならば、何人か人が居てもおかしくはないはずである。

(……やはり、何かあったのか。大ごとじゃなければいいが……)

ダイがそんなことを考えていると、どこからか一人の少女(?)がやって来た。

おそらく、彼女も小ビーストなのだろう。

「だめだよトニオ、こっちには人っ子一人居なかったよ。……あ、二人見つけたんだ?」

「残念だが、こいつらは違う。今来たばかりの同業者だ。人を探しているらしい。」

「あの一、こちらは……?」

そう聞いたのはエミリアだった。

「おっと、そういや自己紹介がまだだったな。俺は、トニオ・リマ。フリーの傭兵だ。」

「あたいは、リイナ・リマ。夫婦で傭兵をやってるんだ。」

「あたしたちは、リトルウィングって会社の社員です……一応。あたしはエミリア・パールシバル。こいつはあたしのパートナーの……」

「ダイト・アーディガンだ。呼ぶときはダイで……」

「なあ、お前。」

ダイが言い切る前にトニオが話しかけた。

さっきからダイの顔をジロジロと見ている。

「……………なんだ？」

「いや、どこかで見たことある気がするよ……………。お前、俺と会ったことないか？」

トニオがそう言うと、ダイは一瞬だが顔をしかめた。トニオはその一瞬を見逃さなかった。

「……………気のせいだ。お前とは初対面のはずだ。」

「初対面なのに、なんで俺が小ビーストだってわかったんだ？」

「……………ただの予想だ。おそらく、と言っただろう。」

「じゃあ、なんで年上だとわかったんだ？小ビーストだからといって、絶対に年上とは限らないだろ？」

「……………何が言いたい？」

ダイは怒りがこもったような表情でトニオを睨んだが、トニオはそれを臆することなく受け止めた。

「ト、トニオ。それぐらいにしまって……………ね？」

「ダ、ダイもほら……………落ち着いてさ……………」

互いのパートナーになだめられ、二人は睨み合いを終了した。

初めて見たダイの態度にとまどいながらもエミリアは話を始めた。ちなみに、ダイはその後ろで黙って立っている。

「……………え、えっと、あなたたちも人探し？」

エミリアの質問にもう落ち着いたトニオが答える。

「俺たちは、文化保護地区の見回りを頼まれてここまで来たんだよ。」

「

「文化保護地区？」

エミリアは首を傾げた。

それを見たトニオは少し呆れた表情を浮かべた。

「おいおい、そんなことも知らずにここまで来たのか？」

「駆け出したから仕方ないんですー！」

「……だが、文化保護地区がある観光地のわりには妙だな。」

落ち着いたのかダイが思った疑問を口にした。それを聞いてエミリアも疑問を感じた。

「うん。誰もいないってのは不思議だね。船はこんなにいっぱいあるのに……」

「……なるほど、カンはいいいみたいだ。」

トニオが感心したような言葉を言っていると、リイナが口を開いた。

「なんだか気配も異様だし、原生生物も、やけに凶暴だった。奥で、何かが起きてるのは間違いなさそうだよ」

「どっちにしろ、奥に進まなければいけなさそうだな。」

ダイとエミリアの人探しもトニオとリイナの見回りも奥に進んで行かなければ始まらない。

そこで、トニオが一つの案を出した。

「目的も一致してるようだし、しばらく俺たちと組まないか？」
「……………」

ダイは無言だった。

先ほどまで睨み合っていた相手と組むのは気がのらないのだろう。

「お互い、さっきのは忘れようぜ。やる事やらないとお前も困るだろう？」

「……わかった。だが、足をひっぱる可能性があるぞ。」

ダイはエミリアに視線を向けた。

「言いたいことはわかるけど、そこであたしを見ないでよ！」

「否定できるのか？」

「……たまに、あんたが鬼に見えるよ……」

エミリアが拗ねたように言う。

そんな二人を見ていたトニオはつい笑ってしまった。

「ははは……。駆け出したのはわかったから、そこまで過度な期待はしねえよ。」

「あ、駆け出しなのはあたしだけで、ダイは違うからね。」

ダイの強さを知っているエミリアは、彼が駆け出しとは思われたくないのかフォローするように言った。

「わかるさ。もし、俺の推測が当たっているならな……」

「……え？」

トニオは小さな声で言った。そのため、近くに居たエミリアにしか聞き取れなかった。

一方、ダイとリイナはこれからの方針を話し合っていた。

「とりあえず『カーシュ族』の村まで行こう。そこに行けば、何か

手がかりがあるかもしれないからね。」

「それはいいが、道はわかるのか？」

「カーシュ族は、土地を転々と移動するから、はぐれていた仲間がわかるように森に目印を残してるんだよ。」

「なるほど、それを辿って行くのか。」

「そう。カーシュ族にしかわからない文字だけど、あたいはあらかじめ学んできたから。」

二人の話し合いはあっさりと終了した。

ダイの見たところ、リイナは計画性のあるタイプのように見える。

「カーシュ族の目印か……。どんなのなんだろう……。？」

二人の話を聞いていたエミリアはそんなことを呟いていた。その脇で……

「……髪の色は違うが、やっぱり、別人とは思えないな……。」

ダイを見ながら、誰にも聞こえないようにトニオは呟くのだった。

「ホラ、見て！あれがカーシュ族の目印だよ！」

リイナは岩に刻まれたカーシュ族の目印を指さした。

三人には読めないが、たしかに文字のようである。

そんな目印にエミリアは興味津々だった。

「へえ、目印ってこんななんだ。おもしろい形してるね。」

「ちよっと待ってて。解読するから……。」

リイナが目印を解読している所をエミリアが観察している。
その後ろでダイとトニオは待っていた。

「なあ、ダイ。」

「……………なんだ？」

不意にトニオがダイに話しかけた。無視する理由もないので、ダイは返事をする。

「さっきのことだけどよ……………」

「……………忘れるんじゃないのか？」

「話したくないりゃ別にいいさ。俺の独り言だと思ってくれ。」

トニオは少し間を開けてから喋りはじめた。

「もし、俺の推測が当たっているなら……………俺はお前を知っている。」

「……………」

「……………だが、今は聞かねえ。話す時がくるまで待つさ。」

「……………」

ダイは何も言わなかった。いや、言えなかったのかもしれない。喋ると無表情が崩れてしまいそうだったから。

すると、リイナが解読を終えて二人を呼んだ。

「わかったよ！こっちの方向みたい！」

「よし、行こうぜ！」

「……………ああ。」

リイナの後をエミリア、トニオ、ダイの順で付いていく。

「……すまない、トニオ。」

誰にも聞こえないほどの小さな声でダイは静かに口にした。

「すごい環境……。これがクラウドッグ地方なの？」

「この辺りは開拓されていない土地が多いからね。」

エミリアの質問にリイナが答えた。

リイナが案内した先は、この惑星には珍しい、木々の生い茂る森である。森の中には所々に荒れた道があったり、先ほどまで原生生物がいたかと思われるような痕跡が多く見つかった。

「未開の熱帯雨林といったところか……。この先に、カーシュ族の村があるのか？」

荒れた道を見て疑問を感じたダイがリイナに尋ねる。

「間違いないよ。さっきの目印にそう書いてあったからね。」

リイナはそう答えるが、現在のメンバーの中で、その目印を理解することができるのはリイナだけなので、その言葉を信用するしかなかった。

しばらく進んでいると、数匹の原生生物を発見した。

まだ、四人の存在に気づいていないようである。

「……妙に気が立って見えるな。」

「でしょ？ただ、一言で凶暴とは言えない感じなんだよ。うまく言

えないけど……」

リイナの言葉に、ダイは共感した。

この惑星の原生生物は元々凶暴なのだが、何かが原因でさらに気が立っているという感じである。

「エミリアを前に出そうかと思っただが……やめておくか。」

「ちよっ!!そんなこと考えてたの!?!」

「フォローばかりでつまらないだろう?」

「十分!!フォローだけで精一杯だって!!」

エミリアは大声でダイに主張する。

その声量は、離れた場所にいる原生生物が気づくのに十分なほどだった。

「おい、敵さんに気づかれたぞ。」

トニオがやれやれ、といった感じで言いながらダガーを装備した。

それに続き、ダイはセイバー、リイナは両手にハンドガン、エミリアはロッドを装備する。

「行くぜ!」

トニオのかけ声と共にダイたちは敵に向かって行った。

「腕は鈍ってないようだな。」

迫り来る原生生物たちを撃退した所で、トニオはダイにそう言った。

「どつという意味かわからないな。」

周辺に敵がいないことを確認し、武器をしまいながらダイは答えた。

「強いつて意味だよ。」

「……そいつはどつも。」

そんな会話をしながら進んでいく二人をエミリアは疑問の表情を浮かべながら見ていた。

「なんか、息が合ってるよね……。ダイも楽しそうだし……」

「うん、そうだね。トニオも……」

二人はそれぞれのパートナーを見ながらそう話していた。さらに奥に進んでいくと道が二手に分かれている場所に出た。片方の道はさつきまでと同じような道が続いているのだが、もう片方の道を見た瞬間、エミリアが真っ先に驚きの声をあげる。

「炎が道をさえぎってるよ!?!」

「多分、カーシュ族がやったのね。仲間にしかな道がわからないように。」

状況からリイナはそう推測した。

「さて、どつするよ?」

トニオがまわりをうろつきながら口にした。

ダイもこれといった目的もなしに周囲を歩いていると……

「ん？」

ある場所で足を止めた。

ダイはその場所に屈み、地面に刻まれたそれを確認した。

「ダイ、どうしたの？」

エミリアが屈んでいるダイに近づき声をかけた。

「これがさっきの目印と似てる気がしてな……」

「……あ！カーシュ族の目印じゃん！」

ダイが指さしている部分を覗き込むと、エミリアが声をあげた。

その声が聞こえたらしくトニオとリイナも集まった。

本当にカーシュ族のものかどうかをリイナが確認をする。

「うん、カーシュ族の目印で間違いないね。」

「なんて書いてあんだ？」

「ちよつと待つて。えつと……」

トニオに催促され、リイナは解読を始めた。

そこにはこう記されていた。

『我ら、火を恐れる者なり。恐れ抱く者、恐れに焼かれるだろう…』

…』

「暗号か。それにしては単純だな。」

そう言うと、ダイは臆する事なく炎で塞がれた道に向かって歩き出しました。

「あ、そっか。そういうことか。」

ダイの意図を理解したエミリアも後を追うように歩き出した。

「あ、おい！……仕方ねえ、追うぞリイナ！」

「う、うん！」

トニオとリイナも流されるように二人の後を追った。

結果から言くと、ダイの行動は正解だった。

道を塞いでいた炎は、人の手によって生み出されたまがい物であり、問題なく通過する事ができたのである。

『我ら、火を恐れる者なり。恐れ抱く者、恐れに焼かれるだろう…』

…』

つまり、火を恐れると焼かれる。逆に考えれば、火を恐れなければ焼かれる心配はない、ということになる。

この場合、炎が存在する道を進めば正解となる。よく考えればわかる単純な答えにトニオは歎いていた。

「くそつ、こんな簡単な暗号に気づかなかったとは……」

「まあまあ、先に進めたんだからいいでしょ？」

落ち込んでいるトニオをフォローするようにリイナがなだめた。

その後も何度かカーシュ族が仕掛けたと思われる罠に遭遇したが、ダイの機転もあり、罠にかかることなく順調に進んで行った。

「おつ、これも目印だな。リイナ、解読頼む。」

「あいよ。……うーん、これは。」

トニオが目印を発見し、リイナが解読を始める。

他の三人はリイナが解読を終えるまで待つ……

「あ、それ……この先の道のことについてだ。」

……はずだったのだが、エミリアがそんなことを言い出した。

「え?」

リイナが驚いたような表情をエミリアに向ける。

驚いているのはリイナだけではない。トニオとダイもリイナと同じような表情をエミリアに向けている。

そんな三人の表情には気づかず、エミリアは言葉を続けた。

「今までの目印と違ってかなり詳細に書いてあるね。これが最後の目印って事かな?」

エミリアはまじまじと目印を見はじめた。

まさか、とダイが思った時、さらにエミリアが口を開く。

「……ふーん、なるほどなるほど。よかった、わりと近い場所にあるみたい。」

エミリアはスラスラと目印を解読してしまった。

「……なんで、読めるんだい?」

おそらく、三人中三人が感じている疑問をリイナが代表して質問する。

だが、エミリアはその質問に対して、逆に疑問符を浮かべた。

「なんで……って、さっきからリイナが呼んでるのを後ろで見てたし。」

「それにしたって、理解早すぎねえか？少なくとも俺はさっぱりだぞ。」

トニオの言う通りであった。

本来、知らない文字を理解するためには、一つ一つの文字を覚えなければならぬ。次に、その文字を組み合わせてできた単語の意味を理解する。さらに、その単語を組み合わせてようやく文章が完成する。

要は、短時間で理解できるほど、カーシュ族の文字は単純ではないのである。

「……そ、そんなことないって。誰だってできるよ、このぐらい！ねえ、ダイもわかったよね？」

「わかると思うか？簡単に理解できれば苦労しない。」

ダイは即答した。

現に、リイナですら事前に学習しておかなければ読めないのだから。

「わかるって、絶対わかる！ちゃんと見てなかったただけだよ！」

あくまで認めない様子である。

「ほら、ほら！こつちだよ、早くいこー！」

会話から逃げるように、エミリアは案内しようとして先に歩き始めた。
その時……

「……おまえ、とまれっ！」

突如、少年の叫び声が聞こえた。
それと同時に、何か風を切る音も響いた。

「……っ！馬鹿、危ねえっ！！」

トニオが叫んだのと、ダイが動いたのはほぼ同時だった。
真っ先にエミリアの下まで移動したダイは、彼女を抱えてその場から横に飛んだ。

「うえっ!?!」

急にダイに抱えられたエミリアは何が起きたのかわからない顔をして
いたが、先ほどまで立っていた場所を見て、自分が狙撃された事
を知った。

「……ロングボウ（弓）か！どこからだ!?!」

地面に着地したダイは、エミリアの体を右手で抱えながら辺りを見
回す。

わずかにエミリアの頬が赤くなっていたのだが、状況が状況のため、
誰もそのことに気づきはしなかった。

「トニオ！あそこだよ!！」

リイナが指さす先には、たしかにロングボウを構えている少年がいた。
見慣れぬ民族衣装を纏っている所から、カーシュ族の少年と見るのが妥当だろう。

トニオは、少年のいる場所まで駆け出す。

「このっ！」

ヒューマンと比べ、身体能力が高いのがビーストの特徴であり、少年が二発目を構えるよりも先に、セイバーを構えて飛びかかった。

「もらったぜ！」

射撃武器は近距離からの攻撃に弱い。

確実にとらえたと思ったその時、少年が雄叫びと共に手を掲げた。

「はああああっ！！！」

「……………っ！？まずい！！！」

少年の動きの意味をいち早く察したダイは、駆け出した。

右手を掲げた少年の上空に炎を纏った何かが現れた。そこから発生した炎がトニオに放たれる。

「なにっ！？」

炎がトニオに当たる寸前だった。

「はあっ！」

「ぐわっ！？」

何とか間に合ったダイの蹴りがト二オの体を吹き飛ばす。その結果、炎は外れ、ト二オは近くの木に打ち付けられ、ダイはそのまま地面に着地する。

「ダイ！」

「ト二オ！大丈夫！？」

エミリアとリイナがそれぞれそばにやってくる。

「あ、ああ。ダイ！てめえ、他に方法なかったのかよー！！」

「助けたんだから文句言うなよ。あの炎をくらうよりは蹴りの方がマシだろ？」

助け方に関して意見を言うト二オに、ダイはさっきまでと違うしゃべり方で答えた。

「しかし、さっきのは……」

ト二オがそう口にする、四人は少し離れた場所に立っている少年に視線を向けた。

少年は、敵意をむき出しにしている状態だった。

武器をスピア（槍）に持ちかえ構えていた。

「先へは行かせないっ！！」

「なんだ、こいつ！」

「これ以上近づかせはしないぞ！！村は、ぼくが守る。」

「な、なんかすごく勘違いされてない……？」

「ひょっとしてあんた、カーシュ族？村で何かがあったってこと……？」

「だとしたら何だっ！！許さない、許さないぞ！！村は、みんなは、

ぼくが守るんだー!!」

カーシュ族と思われる少年は頭に血がのぼっているのか、こちらの言葉に耳を傾けようとはしなかった。

「話を聞く様子はなさそうだな……。エミリアとリィナは少し下がっててくれ。」

「う、うん!」

「わかったよ!」

エミリアとリィナは念のために武器を装備して、後ろに下がった。

「トニオ、油断するなよ?」

「へっ、言ってくれるな。来るぜ!」

トニオが言い切る前に少年は飛び上がりスピアを振り下ろしてくる。

「はあっ!」

ダイはソードでそれを受け止めた。武器同士がぶつかる鈍い音が響く。

(かなり速いな……。大振りのソードだと少し不利だな。)

少年は一度距離をとる。

「おらっ!」

そこに、セイバーを装備したトニオが切り掛かるが、素早く回避された。

その間にダイはダガーを両手に装備した。ツインダガーである。

「トニオ、追撃頼む。」

ダイが少年に切り掛かる。

装備をソードからツインダガーにしたため、威力が落ちる分、速さが増している。

「はあっ！」

少年はスピアをまっすぐに突き出してきた。

ダイは少し体を横にずらして攻撃をかわし、スピアをおさえる。武器をおさえられ、動きを止められた少年にトニオが飛び掛かる。

「少し眠っててもらっせ！」

「……………くっ！」

決まる、と思ったが少年はスピアから手を離さずにそのまま体を回転させて上空のトニオに蹴りをかました。

「うおっ!?!」

ガードはしたが、勢いでトニオは後ろに飛ぶ。

そして、そのまま回転の勢いを利用してスピアを引き抜き、着地し、てすぐさまタックルをしてきた。

「ぐっ……………!!」

予想のできない動きにダイは反応できず、衝撃を減らすために自ら後ろに飛ぶのが精一杯だった。

「こいつ、なんて動きしやがる！」

「戦い方は無茶苦茶だが、大したものだ。」

「感心してる場合か！」

「わかってる。さて、どうするか……」

ダイは作戦を考える。

「エミリア、リイナ。ちょっと来てくれ。」

ダイは三人を集めて考えついた作戦を話す。

順番に攻撃を始めていき、相手はその攻撃をかわし続けて体勢を崩した所を狙う。

攻撃する順番は、エミリア、リイナ、ダイ、トニオの順となった。

二撃目以降は相手の動きを読む必要があるため、エミリアはそれが
必要ない初撃にした。

「……わかってはいるけど、悔しいなあ……」

かわされる事を前提にされている気分のエミリアは小さく呟いた。

「何をコソコソしてる！」

少年は四人に向かって駆け出す。

「エミリアー！」

「やあっ！」

エミリアのロッドから放たれたフォイエが少年に向かっていくが、横にとんで軽くかわされた。

フォイエをかわし、地面に着地した瞬間……

「もらったよ！」

「……くっ!？」

リイナのツインハンドガンによる射撃が襲う。

何とかそれに反応した少年は、上空に高く飛び上がる。

そこに……

「そらっ!」

「……うわっ!？」

同じように飛び上がっていたダイのダガーが切り掛かる。

身動きがとれない空中でかわす事ができない少年はそれをスピアで受けて落下する。

受け身を取り、着地したところに……

「……………っ!？」

トニオがいた。

「今度こそ、眠っててもらっせ!」

トニオは少年の腹に拳を打ち込んだ。

少年はそのまま地面に倒れた。

「ふう、手こずらせやがって。」

トニオが倒れた少年を見ながら言った。

「この子がカーシュ族？あたしたちと同じように見えるけど……？」
「カーシュ族っていうのは、種族じゃない。あたい達のような文明を持たず、原始的な生活をしていた『部族』なのさ。」
「種族じゃなくて、部族ねえ……」

少年の姿を見て疑問を浮かべていたエミリアにリイナが説明した。その横で、ダイは最初に彼が言っていたことが気になっていた。

「俺たちを何かと勘違いしていたようだが……」

「どうしよつか、この子。」

「助けたところだが、どうも村の方が気になる。」

「ダイも？実はあたしも、カーシュ族の村のことが気になって……」

先ほどの様子から見て、カーシュ族の村で、何かがあったということとは間違いないだろう。

そこで、トニオが案を出した。

「仕方ねえ、手分けするか。俺たちは一旦こいつを連れて手当てに戻る。お前たちは先に進んで、様子を探っておいてくれ。」

「えっ……！あ、あたしたちが先に進むの？それって、逆のほうが良くない？」

たしかに、腕のあるトニオとリイナが先に進んだ方がいいのかもしれないが、そうはできない理由があった。リイナがその理由を口にした。

「あんたたちの船に、医療ポッドとか、この子を手当てできるような設備はある？」

「……ない。」

ダイとエミリアが乗ってきたマイシップは、移動手段にしか利用されないの、その他の設備がないのであった。

「うー……一気に戦力半減か……。いやな予感がするなあ……」

暗くなつていくエミリアにトニオがフォローするような言葉をかける。

「そう心配するなつて。なるべく早く早く追いつけるように急ぐさ。それに、頼りになるパートナーがいるだろ？」

ダイを見ながら、トニオは言った。

ダイは軽くため息を吐いてから言った。

「……善処はするが、急ぎで頼む。」

「了解。んじゃ、頼んだぞ。」

そう言つて、トニオとリイナはカーシュ族の少年を連れて、来た道に戻って行った。

二人になつた所でエミリアが口を開いた。

「なんだか、ただの人捜しだと思つてたのに、どんどん話が大きくなつてくね……」

「……ああ、何事もなければいいが……」

カーシュ族の村で何かあつたのは間違いないだろう。だが、その何かにダイはいやな予感がしていた。

「とりあえず、少し休みをとるか。」

「そうだね……そうしよう。」

何が起きても受け入れるしかない。
すでに、ミカから聞いた旧文明人の問題もある。

（巻き込まれ体質なのかね……俺は。）

そんな体を恨みながら、ダイは休憩できるような場所を探すために歩き始めた。

第2章 Act 1

《カーシュ族の少年》（後書き）

第2章 Act 1

《カーシュ族の少年》

終了です。

戦闘シーンにつきましては、スルーということでお願ひします。

次回は

第2章 Act 2

《黒衣の破壊者》

省けそうな所は省く予定です。戦闘よりも会話を優先。

第2章 Act 2

〈黒衣の破壊者〉（前書き）

一ヶ月以上遅れてしまいました！
すいません！

原因は色々ありますが、言葉が思い浮かばなかったのが一番の原因です。

ここ、ゲームだとほとんど操作する場所なんですよね……
会話なんて最後だけだし……

そのため、今回はオリジナル部分が多いです。
それでもよろしければ、読んでやってください。

それと、気がつけばPV数が一万越えていて驚きました……
ユニーク数も二千ほどに……
本当、更新遅くて申し訳ないです……

「そろそろ代わるっか？」

カーシュ族の少年を背負いながら歩いているトニオにリイナが聞いた。

「いや、大丈夫だ。」

「そう？なら、いいんだけど……」

リイナの表情は少し考え込んでいるような表情に見えた。そんな表情に気づいたトニオがリイナにその理由を尋ねる。

「何か気になる事でもあんのか？」

「あ、いや……ダイの事なんだけどさ……」

どうやら、リイナも感じていたようである。

彼、ダイト・アーデイガンに対する疑問を……

「あいつに似てると思うか？」

「似てるっというか……ねえ？」

トニオと出していた答えとリイナが出した答えは同じだろう。

彼がある人物と非常に似てること……いや、似すぎていること。

「別人とは思えないよ。やっぱり、リュ……」

「リイナ。」

リイナがその人物の名前を口にしようとした時、トニオがそれを制

した。その名を口にさせないために。

「早くこいつを船に運んで手当てしてやるつぜ。」

「う、うん。」

リイナはかしこい。

だから、何も聞かずに頷いたのだった。

その後、カーシュ族の少年を連れて船に到着するまで、二人がその人物の話をする事はなかった。

トニオとリイナが船へ向かっている頃、ダイとエミリアはカーシュ族の村へ向かっていた。

「エミリア。道は間違いないのか？」

カーシュ族の村への案内はエミリアがしていた。

本来ならばリイナの担当だったが、彼女とは別行動をとっている。

重要な事を見落としていたダイがどうしたものかと考えていると、エミリアが『道ならわかる』と言い出したのである。

「間違いないよ。さっきの目印に詳しい道のりが書いてあったから。やっぱりあれが最後の目印だったんだね。罨も仕掛けられてなさそうだし、村までもうすぐじゃないかな？」

エミリアの言うさっきの目印とは、カーシュ族の少年が現れる前に見つけた目印のことで、ちょうどエミリアがカーシュ族の文字を読めるようになっていた時である。

「文章、全部覚えてるのか？」

「え？そっただけど……」

「……そうか。なら、案内は任せる。」

「うん、任せて！」

エミリアはどこか嬉しそうに答えた。自分が頼りにされている事が嬉しいようだ。

(この短時間でそこまで理解してるのか……)

自ら前に出て進んでいくエミリアを見て、ダイはそんな事を考えていた。

「どうしたのー？早く行くよー！」

考え事をしていたため、歩く速度がゆっくりになっていたダイをエミリアは大声で呼んだ。

(とりあえず先に進めるなら良しとするか……。あいつのやる気を奪うわけにもいかないしな。)

そう判断したダイは、少し速くなったあしどりでエミリアの後を追った。

感じた疑問を後回しにしすぎではないか、と思うダイだった。

原生物たちを撃退しながら、二人は村までもう少しといったところまで来ていた。

ちなみに、ここまでダイが前衛だった事は言うまでもないだろう。だが、エミリアの援護も上達していた事を付け加えておく。

「あのさ、ダイ。」

「なんだ？」

歩きながらエミリアに声をかけられたダイは、足を止めることなく返答した。

「言いたくなかったら別にいいんだけど……トニオと何かあったの？」

エミリアはとても言いづらそうに尋ねた。

その質問にダイはしばらく黙っていたが、じきに口を開いた。

「あいつの……昔の同僚に似ていたらしい。」

「昔の同僚……？」

ダイ自身、らしくないと思っていた。

どうして質問に答えてしまったのか。なぜ『昔の同僚』などと不必要なことまで言ってしまったのか。

エミリアには無理に聞き出すつもりはないのだから、別に答えずに黙っていても問題はなかった。

『なんでもない』とでも言えば、会話を終わらせることも出来た。そうしなかった理由がダイにはわからなかった。

「あ、そういえばさ！トニオたち、もう船に着いたかな？早く合流して……」

黙ったままのダイを見て、エミリアが話題を変えようとした時……

ゴゴゴゴ……

突発的に訪れた大きな揺れが二人を襲った。
その揺れに二人は反射的に膝をついた。

「きゃあ！じ、地震！？」

「ただの地震……だったらいんだがな。」

「揺れが大きくなってきてる！こっち来るよ！」

グオオオオツ！

そんな雄叫びと共に、地面から巨大な何かが現れた。
それは、大型の原生生物だった。

「な、なによ！？あの戦車みたい奴は！？」

「あいつは、たしか……『バグ・デツガ』だったか。」

四足歩行で顔面が鎧のような皮膚で覆われた原生生物『バグ・デツガ』に戸惑うエミリアにダイが解説をする。

エミリアは初見だったので驚いていたが、ダイは旅の途中でこなし
ていた依頼の際に遭遇した事があった。

バグ・デツガは二人の姿を確認すると、再び雄叫びをあげて二人の
方へと駆け出した。

「エミリア。目、閉じてろ。」

「えっ？」

訳がわからない顔を浮かべたエミリアだったが、言われた通りにギ
ョツと目を閉じ、さらに両手で顔を覆った。

エミリアが目を塞いだ事を確認したダイは、丸いボールのような物を取り出し、それをバグ・デツガの前に落ちるように投げた。投げるとほぼ同時にダイは腕で目を覆いながら顔を背けた。そして、カッという何かが弾けるような音と共に強烈な光が放たれ、その光を直視してしまったバグ・デツガは、ふらつきだした。そのすきに、ダイは今だに目を塞いでいるエミリアの手を掴み、少し強引に引っ張った。

「え？きやつ！」

ダイはエミリアを連れ、ひとまず近くの岩に身を隠した。落ち着いた所でエミリアは気づかれぬ程度の小さな声で口を開く。

「あ、あんたなにしたのよ？」

「閃光玉を投げただけだが……？」

「なんでそんなの持ってたのよ。」

「なにかと役に立つからな。それより……」

ダイは岩から顔だけ出してバグ・デツガの様子を観察し始めた。それに、エミリアもつられるように顔を出す。

どうやらバグ・デツガの視界は回復したようで、二人の姿を見つけようと周りを見渡していた。

「さて、エミリア。」

「えっ？」

「あいつとはどう戦えばいいと思う？」

もちろん、その答えをダイは知っている。

では、なぜそんな質問をしたのかというと、エミリアの知力を試してみるためだった。

「うーん……。見た感じだと、正面から攻撃してもダメそうだね。頭以外の場所を狙うしかないかな……」

エミリアは口元に手を当てながら見事に正解を口にした。鎧部分のない背後を狙って攻撃していくのが、バグ・デツガとの戦闘で一番有効な手段となっている。

「その通りだ。奴を前後に挟んで戦うぞ。」

「わかった。片方が注意を引けば狙いやすいもんね。」

おそらく、エミリアはこう考えているのだろう。

ダイが相手の注意を引く……。つまり、囷となってくれろ。だからこそ、ダイの次の言葉に驚かざるを得なかった。

「ああ、お前に囷になってもらう。」

「……………はい？」

数秒の思考の後、エミリアはその言葉の意味を理解した。

「な、なんであたし！？あんたがやるんじゃない……むぐっ!?!？」

「声がでかい。」

大声を出そうとしたエミリアの口をダイが手で塞いだ。

現在の状況を思い出したエミリアが頷いたところでダイは手を離れた。

苦しかったらしく、軽くせきをしてからエミリアは口を開く。先ほどとは違う小さめの声で。

「……………なんであたしが囷なのよ。」

「俺が囷になるのはいいんだが……。おまえ、あいつを倒せるほどの攻撃ができるか？」

「……あ。」

そう言われ、エミリアは気がついた。そして、納得した。

バグ・デツガは、その巨体に見合うタフな肉体を持っている。

生半可な攻撃では、まともなダメージは与えられないだろう。

エミリアも頭では理解してたのだが、そう簡単に割り切れるものはなかった。

「でも、囷なんて……」

「安心しろ。必ず仕留める。」

ダイがそう言うと、エミリアは黙ってしまった。

その様子を見たダイは、さすがに無理があったかと頭をかきはじめた。

「……無理強いはよくないな。持久戦になるが、俺が囷に……」

「うっん。あたしがやる。」

別の手段を出そうとしたダイの言葉をエミリアがさえぎった。

「いいのか？」

「それが一番の方法だもんね。少し怖いけど……あんたを信じる。」

「……わかった。」

エミリアのその覚悟を無駄にするわけにはいかないダイは頷いた。

こうして、エミリアを囷としたバグ・デツガとの戦いが始まるようになっていた。

「……とはいえ、やっぱり怖いなあ……」

先ほどまで身を隠していた岩を背にして、エミリアはバグ・デツガと対峙していた。

ロッドを持っているその両手はわずかに震えている。

だが、バグ・デツガの背後に回り込んだダイの姿を確認したとき、その震えはおさまった。

「すう……はあ……」

ゆっくりと深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。

そして……

「たあああっ！」

エミリアは、バグ・デツガに向かってフォイエを放った。

無論、その炎はあっさりとは弾かれる。しかし、バグ・デツガを挑発するのには十分だった。

雄たけびをあげながら、バグ・デツガはエミリアの居る方向へ突進を始めた。

ダイはソードを装備してその後を追った。

あとは、エミリアがその場から離れ、その背後にある岩にバグ・デツガが激突して動きが止まったところをダイが狙う。

「エミリア！」

ダイの合図と同時にエミリアはその場から退避した。

突進中、急に止まることができるわけもなく、バグ・デツガは岩に

激突した。

「はあああつ！」

動きが止まったバグ・デツガの背後を狙い、ダイはソードを振るった。

その一閃は、見事に鎧のない部分を見事に狙った。

「やった!？」

先ほどの場所から離れた場所まで移動したエミリアが喜びの表情を浮かべた。

だが、次の瞬間、その表情が崩れる。

バグ・デツガが体を震わせ始めたのだ。

「……………っ！」

ダイは思い出した。バグ・デツガのもうひとつの特徴……『放電』を。

「ぐぐっっ！」

ダイは、バグ・デツガの体中から放たれた電撃をまともに受けた。

その衝撃で吹き飛ばされたダイにエミリアが駆け寄る。

「ダイ!大丈夫!？」

「ああ……………。なんとかな……………」

膝をつきながらそう口にするダイの言葉は、痺れているせいで若干震えていた。

その状況を見過ごしてもらえないわけもなく、バグ・デツガは二人の居る場所を向いた。

「……ったく、少しは休ませろってんだ。」

ダイは、内面の焦りを感じさせないようにしながら言った。正直に言うと、この状況はかなりまずい。

体の痺れのせいで満足に動くことができない今のダイでは、バグ・デツガの突進を止めることはできないだろう。

何か方法はないかとダイが考えている時だった。

エミリアがダイの前に立ったのだ。

「エミリア！逃げろ！」

「……いやだ。」

「何を言っている！止められる相手じゃない！」

「ダイを置いて逃げられるわけじゃないでしょ！あたしは、あんたのパートナーなんだから！」

バグ・デツガが二人に向かって走り始めた。

しかし、それでもエミリアはダイの前から動くことはなかった。

（……くそっ、このままだとエミリアまで……。なにか方法は……っ！？）

ダイは、わずかに動くその体で自身の右手を見た。グローブを着けているその右手を握りしめる。

（これで、救うことができるなら……）

迫り来るバグ・デツガを睨みながら、ダイはゆっくりと立ち上がった。

た。
多少、体のしびれは残っていたが、そんなことは今のダイには関係ない。

(使わせてもらうぞ……!)

ダイはエミリアの前に立ち、バグ・デツガに向かってその右手を突き出した。

「…………え？」

エミリアは目を疑った。

先ほどまで自分たちの方に向かっていたバグ・デツガ。

その突進による衝撃がもうじきやってくるのだと思っていた。

だが、その衝撃はやってくることはなく、バグ・デツガは自分の少し前で止まっている。

……ダイの右手に押さえられて。

ダイはバグ・デツガの体を突進の勢いに乗せるようにして、左後方に流した。

自らの勢いを止めることが出来なかったバグ・デツガは、その先にあった岩に激突した。

「これで…………終わらせる…………!!」

ダイは、強く右手を握りしめる。

その右手を見たエミリアは、さらに目を疑った。

(な、なに…………?ダイの右手から出てる…………黒いの…………)

それを一言で表現するのなら『炎』と呼んだ方がいいかもしれない。それは、ダイの右手を燃やしているかのように発生していた。色が『黒』ということを除けば炎を纏っている、と表現できるだろう。

その黒い炎を右手に纏って、ダイはバグ・デツガの方へと駆け出した。至近距離まで近づいたダイは、バグ・デツガの背後……鎧のない弱点部分に狙いを定めた。

「はあああつ！」

拳による全力の一撃が放たれた。

その衝撃はバグ・デツガだけではなく、その背後の岩ごと粉碎するほどだった。

元々、ダイの最初の一撃を受けてダメージを負っていたバグ・デツガにその一撃を耐えることは出来ず、その場に倒れ込んだ。

「……………」

エミリアは何も言えず、ただ呆然とその光景を眺めていた。動くことすらもできずにいたが……

「くっ……………」

ダイが右手をおさえながら膝をついた所で、エミリアはようやく体が動いた。

すぐさま、ダイのもとに駆け寄る。

「ダイ！大丈夫！？」

「大丈夫だ……」

その口にするダイの右手は、ブルブルと震えていた。その震えを止めようと、もう片方の手で押さえ込んでいる。

「全然大丈夫そうに見えないよ！どうしたの！？ちよつと見せ……」
「大丈夫だっつってんだ！！」

エミリアが右手を覗き込もうとした瞬間、ダイが大きな声でそう叫んだ。

その大声に……というよりも、ダイが大声をあげたことにエミリアは驚いた。

戦いの最中に声をあげることにはあったものの、このような感情を表に出したような叫びは初めてだった。

「……悪い。」

黙ってしまったエミリアを見て、ダイは小さくそう口にした。

自分の身を心配してくれたエミリアに向けてしまった態度を悔やんでいる。そんな声だった。

「すぐ……治まる。……少し、待ってくれ。」

ダイのそんな言葉に、エミリアは何も言わずにただ頷いた。時間にして、数十秒。ダイの右手の震えは止まった。

「ふう……」

「大丈夫？」

「ああ、問題ない。」

いつもの調子でダイはエミリアに答えた。
何が起こったのか、右手から発していたアレは何だったのか。それを聞かないのは、エミリアなりの気遣いだらう。

「……行くか。村はもう近いか？」

「あ、うん。もうすぐのはずだよ。」

「それじゃ、案内を頼む。」

「わかった！」

先に進むエミリアをダイが追うような形で、二人は再び歩き始めた。

「この辺りがカーシュ族の村のはずなんだけど……。なんだか、すごく焦げ臭い……」

人が通ったような痕跡が残されている道を歩いていると、エミリアがそう口にした。それに同意するようにダイが頷く。

道を進んでいくことにその匂いはさらに強くなっていった。

ダイはこんな風に思う。カーシュ族の村に近づくことに匂いが強くなっているのではないか……。

前方に赤い光を発見した瞬間、ダイは小さく舌打ちした。

二人は顔を合わせると、お互いに頷き、その場所に向かって駆け出しました。

「……っ！」

その先にあつたものを見たとき、二人は驚愕した。

カーシュ族の村……だと思われるその場所は、激しい炎によって焼かれていた。生い茂る木々も人が住む家も炎の中にしか確認できな

い。

「なにこれ……ひどい……。一体何があったってどういうの……？」
「……………」

カーシユの少年が怒り狂っていた原因はこれだった。

自分の住む村がこんな状況になっているのだ。近くにいた者を敵と認識するのも仕方がないのかもしれない。

住民は無事なのか。そう思い、周りを見渡していると……

「あ……！ちょっと、あそこ見て！」

そう言いながらエミリアが指さす方向へダイは視線を向けた。

エミリアの指さした先には、数人の集団が確認できた。

「悲願への道はこれで開かれた。……貴様たちにもう用はない。い
ずこなりとも、自由に去るがいい。」

その集団の中に立っている黒服の男が笑みを浮かべながら言い放つ
ていた。

「あいつら……どうみてもカーシユ族じゃないよね。さっきの子と
は全然雰囲気がちがうもの。」

その意見にはダイも肯定したが、ダイには他に気になることがあつ
た。

それは、あの男の周りにいる集団のことだった。

明らかに様子がおかしい。例えるのならば、生気を感じられないと
いう言い方が近いかもしれない。

(あの男の仲間……には見えないな。あの男が操っているような感じだ……)

「ん？あの黒服が持っているのは何？赤い……ノートみたいな……」

黒服の男が手にしている物を見て、エミリアはそう口にした。

「あれがなにかはわからないが……。さっきの奴の言葉からするとあれが目的の物……といったところか。」

「うーん……。……ってか、その隣！あいつ、ワレリー・ココフじやん。」

黒服の男の隣に立っている人物を見た途端、エミリアが比較的大きめの声で言った。

ダイも確認した。短めの白髪に頭にゴーグル。たしかに、二人が探していた人物『ワレリー・ココフ』であった。

だが、それよりもダイには言いたいことがあった。

「この状況で大声を出すな。気づかれたら……」

「む……。？カーシュ族……。ではないようだな。貴様たち、ここで何をしている？」

「……もう遅いか。」

エミリアの声により二人の存在に気づいた黒服の男は、そう問いかけてきた。

しばらく申し訳なさそうな表情をしていたエミリアだったが、意を決したように立ち上がった。

ダイもそれに続くように立ち上がる。もう隠れても無駄だと判断したからだ。

「それはこっちのセリフ！こんなひどいことして……。コレ全部、

あんたたちがやったの!？」

「……………だとしたら、どうする?その脆弱な力で、私と刃交えるか『消え往く存在』よ。」

「『消え往く存在』?お前、何を言っている……………?」

「自己を理解することもできないか。……………すべからく愚かしい存在だな。」

男の言葉の意味を二人は理解することが出来なかった。

「まあいい……………どちらにせよ、貴様たちはここで潰えるのだ!！」

その瞬間、黒服の男は異常な跳躍力で飛び上がった。

「……………っ!エミリア!」

「えっ!?!きゃあ!！」

ダイはエミリアの体を後ろに突き飛ばした。

すぐさま武器を構えようとするが……………

「遅いっ!！」

武器を出す間もなく、黒服の男はダイの至近距離まで近づいていた。武器を出していたら間に合わないかと判断したダイは、蹴りを放った。だが、その足は簡単に防がれてしまう。

「ふっ……………」

「このっ!！」

その後もダイは体術を繰り出していたが、すべて避けられてしまった。

普通のダイならば問題なかったかもしれない。しかし、バグ・デッガの戦闘後ということもあってか消耗していたダイは全力を出せないでいた。

「なかなかやるな……。だが、ここまでだ！」
「……っ!？」

黒服の男が繰り出した蹴りをダイは腕で防いだ……。のだが、その衝撃を防ぐことは出来なかった。
吹き飛ばされたダイは、その先の木に叩きつけられた。

「がはっ!!!」
「ダイ!」
「次は、お前だ!」

ダイを蹴り飛ばした黒服の男は、またも異常な速さでエミリアに近づいた。
そして、エミリアに向かって手をかざす。その手からは不気味な力が放たれていた。

「ぐっ……エミリア……!」

叩きつけられた衝撃で体を満足に動かすことができないダイは、ただその状況を眺めることしか出来なかった。

「まずは、貴様から消えろ!」

ゆっくりとその手がエミリアに近づいていく。

「いや……いやあっ!」

その時、エミリアの叫びに反応したかのように、彼女の額が輝きだした。

光は次第に強くなっていき、弾けた。

それと同時に黒服の男はエミリアから離れた。

「何……？」

エミリアは光を放ったまま宙に浮き始める。

その姿に、ダイは見覚えがあった。

『この力……まさか、あなたは……』

エミリアが口を開く。その声はいつもの声ではない大人びた女性……

……ミカの声だった。

黒服の男もこの光景に驚いているようで、動きを止めている。

「……むっ!？」

突如、黒服の男がその場から飛びのいた。着地した所でその方向を見る。

そこでは、ダイがハンドガンを構えていた。そう、動きを止めていた所を彼が狙撃したのだ。

「外したか……。射撃は苦手なんだが、四の五の言っていられる状況じゃないしな。」

「……チツ。」

舌打ちを残し、黒服の男は飛び上がった。その姿は一瞬で姿を消し

た。

少々よろめいた体でゆっくりとダイは立ち上がった。

その時、エミリアの体から光が消え、その場に倒れた。

ダイはすぐさま駆け寄り……たい所なのだが、さすがに今の状態でそれは出来ず、歩いてエミリアの倒れている場所へ向かった。

ようやく、エミリアの所までたどり着いた時だった。

「おい、どうした！ やつと追いついたと思ったら……。いったいどうなってるんだ、こりゃ！」

「村が……燃えてる……。誰が、こんなことを……」

トニオとリイナが現れた。カーシュ族の少年を船に届け、急いで向かって来てくれたようで、若干息があがっている。

「あ……ぐっ……」

小さく呻き声を漏らすエミリアをダイが助けおこす。

そんな二人にトニオとリイナが駆け寄る。

「エミリアは大丈夫？ 怪我はそうひどくなさそうだけど……」

そう言いながら、リイナはエミリアの体を調べる。しばらくして、ホツとした表情を浮かべた。

「……うん。気を失ってはいるけど、命に別状はなさそうだね。」

「そうか……。なら、いい。」

「……というか、あたしはあんたの方が心配なんだけど……」

たしかに、ダメージが一番負っているのはダイだった。

多少のダメージならば、テクニクのレスタを使用すればいいのだ

が……

「正直、結構きつい……。レスタ、頼めるか？」

「レスタぐらい自分でも……」

そこまで言つて、リイナは口を閉じた。

ただ黙つてダイにレスタを使用した。柔らかい光がダイの体を癒す。

「悪いな。自分で使えれば良かったんだが、テクニクは苦手だな。」

「

ダイは多少マシになった体を動かしながら言った。

万全、とは言えないが、動くぐらいなら問題ないだろう。

「あつ、おい！お前ら、待ちやがれ！」

先ほど黒服の男の周りにいた集団にトニオが叫んだ。

いつの間にか、全員が船に乗り込んでいった。

「何だつてんだあいつら……。急にハツとしたかと思いきや、一目散に逃げやがった！……こんなに文化保護地区を荒らしやがって、一人残らず捕まえてやる！」

「でも、今の人たち、何か変だったよ。声をかけても、何も反応がなくて……。まるで洗脳でもされてるみたいだった。」

その時、通信音が鳴った。エミリアが持っている通信機だった。

ダイはその通信機を手に取り、機動する。そこからクラウチの姿が映し出された。

『おい、ワレリーの船が動いたぞ！おめえら、きつちり追い立てる

!どうなってるんだ、オイ、エミリア!ダイ!」

「うるさいよ!通信回線なんだから、わめかなくても聞こえてるって!」

『ああ、誰だおめえ?』

「偶然、一緒に行動してたフリーの傭兵だ。」

大声で通信に出たクラウドにリイナが答える。リイナのことを知らないクラウドにダイが簡単に説明をしておく。

「エミリアは今、怪我してる。気も失ってるから、大きな声出さないで。」

『怪我しただと?……あのバカ!』

「悪いが、あいつらの後を追うのは難しいぞ。」

『……わかった、ワレリーはこっちで追うから、てめえらはとつと戻ってこい!』

そう言つて、クラウドは通信を切った。

とりあえず、落ち着いた所でト二才を口を開く。

「……さて、俺たちはこの状況をどう報告したものか。」

「さっき逃げ出した人たちを捕まえて、いろいろ話を聞かなきゃいけないね」

「……となると、カーシュ族のボウズはそっちに任せちまったほうがよさそうだな。」

「その方がいいな。俺たちは、まともに動けるような状態じゃないしな。」

ダイは気を失っているエミリアを見ながら言った。

エミリアだけではなく、ダイ自身もさすがに辛い状態になっているのだが。

「一通りの手当ではしておいたから、あとは寝かせておけば勝手に起きるはずだ。」

「わかった。俺たちは、あの子を連れてリトルウィングに戻るとする。」

「俺たちはもう少し、こここの事後調査をしていくからよ。エミリアとカーシュ族のボウズを連れて帰ってやりな。体は……」

「安心しろ、エミリアを連れて戻るぐらいはできる。」

「なにかあったら連絡するよ。じゃあ、またね。」

二人は、先ほどの集団が逃げていった方向へと走っていった。その姿はすぐに見えなくなった。

ダイはエミリアを背中におぶる。その体は軽く、今のダイでも歩く程度なら問題なかった。

「とんだ依頼になったもんだ……。これで終わり……。じゃないだろうな……」

これから先、何度もこんな出来事が起こってしまうのか。そんな考えがダイの頭をよぎっていた。

「はぁ……。不幸だ……と。」

口癖となってきたその言葉を口にしてから、ダイは歩き始めた。

ダイはマイシップの椅子に腰かけていた。

そばにはエミリアとカーシュ族の少年が横になっている。

ここにはベッドなどといったものは用意されてなく、床で横になる

しかないのだが、さすがにそれはどうかと思ったダイはなぜだか用意されていた毛布を敷いてあげた。
そのあたりも優しさを見せるダイだった。

「……ミカ。いるか？」

ダイは、なんとなくその人物を呼んでみた。今、エミリアに意識がないのならば出てくれるのではないかと思っていたからだ。

『……はい。』

そんな声とともに、ミカが姿を現した。

ダイは、ミカがいる場所へ向き直る。そして、口を開いた。

「こうして話すのは二回目だな。」

「……そうですね。……あの、大丈夫ですか？」

「……大丈夫なのは、怪我のことか？それとも、これのことか？」

ミカの問いに、ダイは右手を掲げながら答えた。

その右手を見て、ミカは悲しそうな表情を浮かべた。

「前に会ったとき、俺の記憶がどうか言っていたよな？」

「……はい。あなたの体を再構築する際に、あなたの過去の記憶を見てしまいました。生まれから……現在までの……。」

「そうか……。だったら、わかるよな？これのこと……。」

申し訳なさそうに言うミカに、ダイは右手を振りながらそう言った。

「すみません」

「なぜ、謝る？」

「あなたにとって、誰にも見せたくない過去を知ってしまいましたから……」

「たしかにそうだが……。そうしなければ、俺は死んでいたんだろう？ だったらしょうがないさ。」

ダイの口調はいつもとは少し違う雰囲気だった。どこか優しさがあるようなそんな口調だった。

「それより、少し休む。リトルウィングに着く頃に起こしてくれ。」
「はい。わかりました。」

ミカがそう答えると、ダイは目を閉じた。しばらくすると、小さな寝息が聞こえてきた。

「あなたのような方に手を貸していただくなど、いけないのかもしれません。あなたは、こんな戦いとは無縁の場所にいたのだから……」

小さな声で、ミカはそう口にした。

第2章 Act 2

〈黒衣の破壊者〉（後書き）

第2章 Act 2

《黒衣の破壊者》

ようやく終了です。

今回は、別のゲームみたいな道具を出してしまいました。
閃光玉って……やりすぎましたかね？

次回は

第2章 後期

《決意》

今回よりは早く出来ると思いますが……

第2章 後期

〈決意〉（前書き）

なんとか早めに出来ました……

だんだん文章がわからなくなってきました。
終われるのかな……この小説。

「……起きてください。もうすぐ着きますよ。」

そんな優しさのある声でダイは目を覚ました。ぼんやりとした意識でその声の持ち主を探す。

声の持ち主であるミカはダイから近すぎず遠すぎない距離で微笑んでいた。

「もうじき、着くようですよ。」

「……ああ。」

「では、失礼します。」

そう言ってミカは姿を消した。

普通の人には姿が見えないのだから消えなくてもいいんじゃないのか、とダイは思った。

(普通の人……か。)

そんな言葉が頭の中をよぎったが、すぐに消し去る。

そんな事を考えている内に、ダイたちの乗っているマイシップは、リトルウィングに到着した。

到着してすぐに鳴りだした通信機をダイは起動させた。

画面に映し出された通信相手はクラウチだった。

『戻ったか。いろいろ聞かせる、といたいとこだが、まずはそのバカをなんとかしないと。チエルシー、頼めるか?』

『アイアイサ。……ン?もう一人イルネ?』

「ああ、カーシュ族の子だ。いろいろと訳ありでな……」

通信機ごしにカーシュ族の少年の姿を確認したチエルシーにダイが答えた。

「悪いが、こいつも頼めるか？このまま放っておくわけにはいかな
いからな。」

「何か厄介なものを引き取ってきやがったな……」

「そう言うな。診察代なんかは俺の給料から引いてもらってかまわ
ん。」

「ちつ、しょうがねえ。チエルシー、そいつも診ておけ。」

「了解ネ」

そう言いながら、チエルシーは通信先から姿を消した。

なにをやっても楽しそうに見えるのは、彼女の不思議な所であ
る。

クラウチは改めてダイの方に向き直った。

「お前はそのままカフェに來い。」

「俺も少し休ませてほしいんだが……」

「なに、ちよつとした報告だ。時間はとらせねえよ。」

そう言って通信は切れた。正確に言えば、一方的に向こうから切ら
れた。

「はあ……」

軽くため息をついてからダイはマイシップを後にした。

ダイは、若干疲れた表情を浮かべながらカフェにやって来た。場所は事務所の隣、居住区とは反対の場所。カフェと居住区が事務所を挟むような並びになっている。店内に入ると、奥の席に座っていたクラウチが手をあげてダイを呼ぶ。入口から発見しやすい席だったおかげで、ダイはすぐにクラウチの姿を確認でき、その席に向かう。

「よう、来たか。先に一杯始めさせてもらってるぜ。」

テーブルにはすでに酒瓶が置かれていて、クラウチの手には酒が注がれたグラスが握られていた。

「仕事中に酒はよくないんじゃないか？」

「固え事言っなって。俺だってお前たちが仕事さえしてりゃ、何しても文句言わねえからよ。」

「そついう問題じゃないだろ。」

「ま、お前さんも一杯どうだ？」

クラウチは酒瓶を持ってダイに近づける。

ダイも一応酒を飲める年齢ではあるのだが、酒は苦手だったため首を横に振った。

たとえ飲めたとしても、仕事中に飲むことはしないだろうが。

注文を取りに来た店員にコーヒーを頼み、店員が去った所でダイが話を切り出した。

「……エミリアの容態は？」

「さつき目を覚ましたってチエルシーから通信があったぜ。怪我だつて大したことねえのに、その程度で気絶しちまうとかいちいち大げさなんだよ。」

気絶した原因は怪我ではないだろう、と考えているダイだったが、その原因を話すとするとミカが存在を話さなければならぬため、なにも言わず黙っていた。

そうしている内に、注文したコーヒーが店員の手によってテーブルの上に置かれた。

用意されている砂糖やミルクには手を触れず、コーヒーを一口啜ると、クラウチが真剣の表情を浮かべて話を始める。

「……でだ、ワレリーの方は俺がとっ捕まえて、取り立てついでにいろいろ話を聞いてみた。」

「そうか……。何かわかったのか？」

「めんどくせえから、結論だけ話すぜ。」

クラウチは手にしているグラスを飲み干し、空にしてから口を開いた。

「ワレリーは、クラウドッグ地方に行ったという記憶がないみたいだ。」

「……記憶がない？」

「だが、気がついた時にはカーシュ族の村にいて、周りがぼつぼつと燃えさかっていた、だよ。」

「確証はあるのか？」

「ヤツとは長い付き合いだ。……嘘は、ついてねえ。」

そう言うクラウチの目は真剣だった。だから、ダイはそれ以上何も言わなかった。

しばらく無言の空間が続いた後、クラウチが口を開く。いつものどこかふざけているような表情だった。

「まあ、俺としては貸してたもんも回収できたし、それ以上特に言

うことはねえよ。」

「……………ああ、借金の取り立てだったな。」

ダイは思い出したかのように言った。

正直、いろいろなことがあるすぎて本来の目的を忘れていたのだっ
た。

「足手まといをかかえてた割にはなかなかの仕事っぷりだと思うぜ。
ま、これからも頑張ってくれよ。」

クラウチは伝票を手にカウンターへ向かった。

しばらくして、テーブルの前に戻って来たクラウチは……

「うちで初仕事終了の記念だ。奢ってやるよ。」

そう言い残し、カフェを後にした。

一人テーブルに残ったダイは、コーヒーを啜りながら考えていた。

（黒服の男。焼かれた村。様子がおかしかった集団。しかも、その
時の記憶がない……………）

疑問に思うことが多すぎて、ダイは考えるのをやめた。

「……………というか、奢りならもつと注文すればよかったな。」

そんなことを呟いたダイはコーヒーを飲み干し、席を立った。

「あの……………」

そのままカフェを出ようとした時、そんな声が後ろから聞こえてダ

イはふりかえった。

そこには、先ほどコーヒーを運んできてくれた店員がいた。

「こちらのお会計がまだなのですが……」
「……………」

店員はテーブルに置かれたコーヒーカップを示しながら言ってきた。どうやら、クラウチが支払った伝票にはダイのコーヒー分の値段が記されていないかったようだ。酔いがまわっていたからなのか、故意なのかはわからないが、とにかく……

「はぁ……………」

少し大きめのため息をついてから、ダイはカウンターへ向かい、会計を済ませる。

そして、先ほどのため息に続くように呟くのだった。

「不幸だ……………」

もはや、お決まりのそのセリフを……

「あ、いただいた。」

カフェを出て自室に戻ろうとしたダイを呼び止めたのは目を覚ましたエミリアだった。

エミリアはダイの姿を見つけると、すぐさま駆け寄って来た。

近くまで来たとき、少し不安そうな表情を浮かべてからダイに尋ね

る。

「なんか、おっさんに呼ばれたって聞いたけど……もしかして、怒られた？」

「なぜそう思う？」

「いや、なんていうか……。あたしが、おっさんに呼ばれるときって、たいがい怒られてたからさ。」

「一緒にするな。ただの報告だ。」

「そっか、よかった……」

安心するエミリアの表情にダイは何か疑問を感じた。

何かを言いたいような、そんな表情にも見えたからだ。

「どうかしたか？」

「あ、えっと……。ちょっと二人だけで話したいことがあるから、マイシップまで来てくれないかな？」

「……別にかまわないが、何の話だ？」

特に断る理由もないので、マイシップに行くことは了承するが、話の内容が気になったダイはエミリアに聞いてみる。

「あつちで話す。先に行ってるから。」

そう言って、エミリアは走って行ってしまった。

残されたダイはしばらく動かずにいたが、そのうちにゆっくりと歩き始めた。

ダイがマイシップにやって来ると、エミリアが一人で立っていた。

ダイから見ると、背を向けている形だ。
エミリアはダイが来たことに気づくと、くるりと向き直す。
それにより、二人は適度な距離で向かい合う形になる。
互いに向かい合ったまま、無言の時間が過ぎる。
その沈黙を破ったのは、エミリアだった。

「話したいことってのは……さ、カーシュ族の村で起きた事なんだけど……」

「ああ、どうした？」

「あだし、あの黒服のヤツと戦った……んだよね？」

エミリアがそこまで言った所でダイは察した。

エミリアが自分の中にいるミカの存在に気づきかけていることに。たしかに戦った。だが、戦ったのはエミリアではない。正確にはエミリアの中のミカが、ということになるのかもしれないが、ダイはミカのことは伏せて答える。

「そうだな……。戦ったことになるな。」

「だよねえ……。あの、体が勝手に動いた感じは……夢じゃないんだよね。」

エミリアにはあの時の記憶がかすかに残っているようである。

「実際に黒服のヤツはいて、カーシュ族襲撃事件もあつたんだから、全部が全部夢のわけないし……」

バラバラになっている記憶が集まってきている、とでもいうだろうか。

記憶が集まるごとに、夢だと思いたい事が夢にできなくなってくる。頭のどこかで、あれは現実だという答えが出てくる。

(今回は、証拠が残っているから……。気づいてもおかしくはないか……)

ダイがそう思ったときだった。

『そうです、夢ではありません』

大人びた女性……ミカの声がどこからか聞こえてきた。

「うえっ!?!だ、誰?」

突然の聞き慣れない声に、エミリアは軽いパニック状態に陥った。さすがに、ダイは慣れたようで驚くことなくうろたえるエミリアを見ていた。

「落ち着け。すぐに出てくる。」

「な、なにが?」

エミリアが意味不明な表情を浮かべていると、ミカが姿を現した。

「ようやく、私の存在に気づいてくれたのですね、エミリア」

にっこりと微笑みながらミカは話した。

突然起きた現象にエミリアは驚くことしかできなかった。

「ちよっ……何あんた!?!い、今あたしの中から出てきた……!?!」

「私はミカ。あなたの中に存在する旧文明の民……」

ミカがそこまで言うと、エミリアが頭を抱えた。

「な、何っ？頭の中に何か、流れ込んでくる！これは……………！」

「どうした……………？」

「記憶の共有です。私のことは、改めて説明するよりも、こうして伝えたほうが早いと思うので……………」

何が起こっているのかわからないダイに、ミカが説明をした。

今のエミリアの頭の中には、ダイが部屋で聞いたミカの話、旧文明の時代に何があったのか、旧文明人の計画についての話の内容が流れているのだろう。

「大丈夫なのか？頭がおかしくなりそうなんだが……………」

「……………」

「……………黙るなよ。」

そうこうしている間にも、エミリアの頭の中には旧文明の記憶が流れ込んでいる。

「え……………。う、嘘……………なにこれ……………こんな、ことが……………？」

「貴方の気持ちはわかります。ですが、これは紛れもない事実なのです。」

「……………信じろつても無理な内容だろうな。」

ダイも初めて聞いた時はまさかと思っていた。正直、今も実感がわかないでいる。

「これって……………あたしたちの抹殺計画つてことでしょ？」

「肉体を器と、精神を命と考えるのであれば、その通りになりますね。」

しばらくすると、エミリアは頭を抱えていた手をゆっくりと下ろした。

どうやら、記憶の共有が終了したようで、ジッとダイを見ていた。

「この前、あんたが言ってきたことはぜんぶ、本当のことだったんだね……。」

エミリアが言っているのは、ダイが入社した時のことである。

あの時、ミカの話聞いたダイは、信じてはもらえないと思いつつもエミリアにその話をした。

もちろん、その時のエミリアがその話を信じることはなく、ダイもそれ以上の話はしなかった。

さらにエミリアは言葉を続ける。

「でもそれじゃ、あのレリクスでのことも夢なんかじゃなくて、実際のこと？」

エミリアはそれを認めたくなかったが、ミカ表情が曇ったのを見て、それを認めるしかなかった。

「……あんたはあたしの代わりに、一度死んじゃってる……？あたしのせいで……あんたは……死んじゃったの？」

エミリアの体は少し震えていた。

自分のせいで他人が命を落としてしまった。それは、まぎれもない事実で、消すことのできない現実である。

「……強引な伝達方法ですみません。心の整理がつくまで、私は姿を消します。落ち着いたら、呼んでください。」

そう言って、ミカは姿を消した。その場には、ダイとエミリアの二人が残った。どちらも何も言わず、ただ立ち尽くしている。しばらくすると、エミリアが口を開いた。

「……ぜんぶ、夢じゃなかった。」

ゆっくりと話すエミリアに、ダイは何も言わず、ただ頷いた。

「あなたは、あたしのせいで……一度、死んだんだ。」

エミリアはひたすらゆっくりと言葉を続ける。話しながら心の整理をしているのだろう。

今にも崩れてしまいそうな……そんな姿にダイには見えた。

「あたしがもうちょっと頑張ったり、気をつけたりすれば、そんなことはなかったのに……」

自分の力不足を悔やんでいるのか、唇を噛み締め、力強く握り締めたその拳は、ふるふると震えている。

「あなたの言うことも全然信じなかったし……あたし、ほんとわがままだけの最低なやつじゃん……」

エミリアの気持ちがちんぷん沈んでいく。

悲しむ少女を眺めて楽しむような趣味など持っていないダイは、いつもどおりに話し始める。

「現に今、俺はこうして生きている。もう終わったことだ。気にすることは……」

「気にするなっってほぅがムリよ！」

フォローのつもりだったダイの言葉をエミリアがさえぎった。
そのまま、言葉を続ける。

「あたしのせいで誰かがいなくなるのなんて……もっ、やだよ、そういうのは……」

今にも泣き出しそうな声で話すエミリアの言葉にわずかな疑問を感じたダイだったが、口にはしなかった。

だが、このまま泣き出されても困るダイは……

ポン……

「あ……」

エミリアの頭に手を置いた。

そのまま頭を撫でる……のではなく……

「わわっ!?!」

頭を左右に揺らし始めた。

撫でられるのかと思っていたエミリアは、意表をつかれたせいからしばらくされるがままに頭を揺らされた。

「な、なにすんのよ!?!」

何往復しただろうか。エミリアは怒りのこもった声をあげながら、ダイの手を掴んでどかす。

人としては当たり前前の行動だろう。

それを見て、ダイは小さな笑みを浮かべた。

「フ……それでいい。」

「……え？」

「お前の落ち込んでいる姿はどうも違和感があるからな。」

それは、偽りのないダイの本音だった。

この行動がダイなりの慰めなのかどうかの確証はない。

だが、それによってエミリアの気持ちを少しでも軽くすることが出来たのはたしかだ。

「ダイ……」

「お前がそんなに繊細だとは思えないからな。」

「一言多いッ!!」

雰囲気を壊すダイの言葉にすぐさまツッコむエミリア。もうその表情には、先ほどのような暗い表情はなかった。

「あのさ、あたし……この仕事は向いてないと思うし、戦つのも好きじゃない……」

そう話しだすエミリアの目は真剣だった。

その目に覚悟を感じたダイは黙ってエミリアの次の言葉を待った。

「けど……向いてなくても、耐えるから。戦い方とか、そういうの教えてよ。たぶん、まだいろいろと迷惑かけちゃうけど……」

「そう思う気持ちが大切だ。……ようやく歩き出せたな。」

ダイにとって、その覚悟は十分だった。

何をするにも、強制されては意味がない。何よりも一番必要なのは、

それをしようと思う心だった。
エミリアは今、その心を手に入れたのだ。

「うん……。戦いが苦手なのは、変わらないけど……。ただ、心構えだけでも……。それだけでも前を向かないと……」

「今はそれでいい。これから先どうなるかはお前次第だ。」

「……。ふー。それじゃあ、さっそくだけど、何をすればいい？ミカのこととかも、身体動かしてれば、だんだん整理つくとおもっし……。……。よし！決まり！うじうじ悩んでも仕方ないし、仕事やろう。仕事！」

そこには、とても今まで仕事を嫌がっていたとは思えない姿のエミリアがいた。

それほど彼女の決意は固いのだろう。

早いうちに訓練でも行い、戦いに慣れさせたいダイだったが……

「……。悪いが、それは無理だ。」

「……。え？なんで？」

疑問の表情を向けるエミリアにダイは静かに答える。

バグ・デツガとの戦闘。黒服の男の襲撃。休む間もなくクラウチの呼び出し。そのままの流れでエミリアとの会話。

ダイが取れた休息は、ほとんどないようなものである。

「休ませてくれ……」

わずかにふらつく足取りで、ダイはマイシップを後にした。

その疲労した表情を見たエミリアは、何も言わずにその背中を見送った。

いくら強いとはいえ、彼も一人の人間。

エミリアは、それを改めて実感した。

「……レツカ。」

自室に戻ってきたダイは、パートナーマシナリーの名を呼んだ。数秒後、起動を始めたレツカが見たのは、なんとも疲れきった表情をした主人の姿だった。

「大丈夫ですか？マスター。」

「……大丈夫に見えるか？」

「見えません。」

正直にレツカは答えた。

ゆっくりと歩いてベッドに腰かけたダイは、大きく息を吐く。

「レツカ、バスルームの準備……」

「かしこまりました。」

「頼んだ、俺は少し休む……」

そう言つて、ダイはベッドに横になった。

レツカが手早くバスルームの準備を終わらせる頃には、ダイはすでに眠りについていた。

起こさないように、レツカはその体にやさしく毛布をかけてあげた。

「お疲れ様でした。マスター。」

自分の主に向けて、小さくレツカは口にした。

この後、目を覚ました彼がバスルームに向かうと、背中を流そうと

レツカが乱入してくるのだが……
それはまた、別のお話。

第2章 後期

〈決意〉（後書き）

第2章 後期

《決意》

終了しました。

物語としては、ここからが本番ですかね。
なんとか続けて最後までいききたいものです。

次回は

二回目となるキャラ紹介です。

オリキャラ紹介

R 23 (前書き)

オリキャラ紹介

R 23 (レツカ)編です。

前回と同じく、前半はキャラ紹介、後半は質問?タイムになります。

もちろん、後半はおふだけです。

オリキャラ紹介

R 23

「名前」

R 23

「愛称」

レツカ（ダイ命名）

「年齢」
？

「種族？」

パートナーマシナリー

「容姿」

髪は赤髪のショートカット。

メイドをイメージした服（パーツ）を着用。

体が小さく、外見は子供とあまり変わらない。

「紹介」

ダイのパートナーマシナリー。

主人であるダイの事はマスターと呼び、それ以外の人物の事は様付けで呼ぶ。

一言で表現するならメイド。家事スキルは完璧。

本来のパートナーマシナリーと比べると、感情を表情に出すことが出来ず、基本無表情。

主人のために尽くすことを存在意義だと考えている。

「作者は」

元々、女キャストとして作成したキャラです。
なんとか出すことはできないか……と考えた結果、パートナーマシナリーとして登場させました。
無口とか無表情な子が大好きなんです。

作者「……ってなわけで、二回目のオリキャラ紹介です。」

レツカ「よろしく願います。」

作者「礼儀正しいな。前はまったく質問出来なかったから、今回はちゃんとやらないと……」

レツカ「質問があります。」

作者「ちよっ！？展開早いつて！まだ質問すらしていないよ！？」

レツカ「思った疑問を言う場所ではないのですか？」

作者「いや、まあ……そうなんだけど。質問するのはこっちっていうか……。あー、もういいや。どうしたの？」

レツカ「第2章に入って思ったのですが……」

作者「うん。」

レツカ「私の出番少ないですか？」

作者「……………」

レツカ「どうして目をそらすのですか？」

作者「いや、その……なんていうか。……すみません！出すタイミングわかりませんでした！」

レツカ「そうですか。私は原作に存在しませんから仕方がないのかもしれないですね。」

作者「あの……何を構えているんですか？」

レツカ「マスターからお借りしたハンドガンです。他に何か言うことはありますか？」

作者「えっと……。レツカのしゃべり方を」と、レツカはくくします。『みたいな感じにしようとしてました。あの子、好きなので……』

レツカ「なるほど、わかりました……と、レツカは銃の引き金を引きます。」

作者「そうそうそんな感じ……って、うわあああっ！……」

オリキャラ紹介

R 23 (後書き)

はい、そうです。質問する気はありません！
キャラと雑談的なことしかしません。
作者の遊び場です。

次回は

第3章 Act0

タイトルは検討中です。

ゲームをやられた方で、思いつく方がいらっしやれば、提案していただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8360u/>

PSPo2 ~ If Story ~

2011年11月16日17時30分発行